

昭和十三年五月廿日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和十三年九月廿日印刷納本 昭和十三年十月一日發行 第四卷 第十號

浄土

十月號



◇仕奉後銃・久持忍堅◇

◎一圓の淨財・一年の慰問

君國のために身命を賭した白衣の勇士達は今や到る處に戦傷を癒し、病苦を養ふておられます。これ等の方々に心の糧として吾等が誇りとする、信仰の伴侶雑誌「淨土」を贈つて法味を愛樂して頂かうと思ひます。何卒この聖なる運動に速時參加して下さい。

病院
慰問

白衣の勇士に法味を捧げよ

◇全國陸海軍病院の全部へ毎月三十部乃至五十部の雑誌「淨土」を贈呈して白衣の勇士達に法味を捧げた
いと存じます。

◇御一人一圓の淨財を御喜捨下さい。一年間毎月雑誌が病院へ参ります

◇毎月五千部は是非入用です。五千人の有志者が必要です。御奮發下さい。

◇個人でも、團體でも、亦金高が一圓以下でも結構です。兎も角この聖き運動に隨喜參加して下さい。

◇御送金は淨土宗務所事務部宛に！ 領收の證には宗報誌上に御芳名を掲載します。

◎一冊の淨土・一生の歡喜

！峰高最の書用教布！刊新

我が信仰

—内容—

往生	念佛	懺悔	本願	知恩院
郁芳隨圓	武者小路實篤	吉田絃二郎	佐藤春夫	岡本かの子

四六判二色刷表紙付
定價六錢（送料三錢）
二十部以上一時に購入
の方には一部五錢とす。
法然上人鑽仰會編

この時代の信仰は？ 念佛の眞骨
頂は？ 法然上人は？ 文壇の巨星
が隨筆風に表現された、新鮮な信仰
の言葉は何人の胸にも法悦の燈びを
點ぜずにはおかない！
この内容、この定價！本書こそ布
教用書の最高峰を行くものである！

文壇の巨星が語る信仰の體驗！



表紙・扉繪……………鈴木金平

法語
解説

平凡の中の崇高と 中村辨康 (六)

隨 見て來た八丈島……………生田花世 (四)

筆 本のなない書齋……………佐藤賢順 (五)

宗良親王と越中國……………荻行密岩 (六)

水禍の中から……………圓山輝二 (五)

信 實 話 猛火の中へ如來と共に……………長谷川良弘 (三)

國 際 事 情 解説……………三浦孝 (四)

婦人の頁 病院慰問など……………本誌記者 (四)



十夜法要の話……………赤尾光雄（児）

芙蓉散華

吉田絃二郎

（三）

歌壇……………與謝野晶子選（二五）

俳壇……………太田耳動子選（三五）

盜人（鈴木金平畫）……………水島弘三（二六）

千姫と出羽守（田村辰三畫）……………今野賢三（二六）

廣東の商人たち（大羽比羅夫畫）……………荒井新（二三）

落語月どろ……………名月亭（二五）

街で拾った話……………（四）黍餅の訓……………（二）

鑽仰運動ニュース……………（五）

編輯後記……………（六）

◇淨土第四卷第十號十月號目次◇

油繪『法然上人の聖像』出づ!!

藝術の至境は?……瞻仰の瞬間に理想の生命を味識するにあり!
宗教の極致は?……永劫の憧憬を現實の胸寸に感得するにあり!

十年の苦心、鏤刻の結晶、髣髴として上人に拜謁するの思ひあり。

小橋 麟 瑞 監修
伊達幸太郎 揮毫



本聖像は監修者十數年來の宿願を實現せるものにして、揮毫者伊達畫伯は在米十八年主として肖像を研鑽しセントルイス美術學校教授たり、その神技は彼地の畫壇を驚嘆せしめ歸朝して東京にあるや時の帝國美術院長子爵黒田清輝畫伯は最高の推辭を惜まざりし本邦洋畫界の先覺者にして人格高潔の士、寔に聖像の筆者たるの資格充分ならん。監修者と揮毫者との協力苦辛三ヶ年の日子を費して昭和十年二月廿五日髣髴として生けるが如き上人の慈容は完成せられ今や世界的名畫なるべしとの推稱の辭を恣にしつゝ、全念佛門流を驚喜の渦中に投じた劃期的傑作である。

竪一尺二寸、横一尺五分、原色十度刷精巧高級品
領布價一葉金五圓也(額用)送料當方負擔

便宜取次 法然上人鑽仰會

聖像一葉各に『法然上人十德頌』(小橋麟瑞著四六版百頁)及『聖像謹解』各一部を謹呈す『十德頌』のみ御希望の方は定價廿錢、送料二錢にて御頒ちします。

東京市芝區芝公園明照會館内
振替東京八二一八七番

淨土

十月號

これを見^みる

をりくごとにおもひいで

南無阿彌陀佛^{なむあみだぶつ}と

常^{じょう}になへよ

法然上人詠^{しやう}



法 語
解 説

平 凡 の 中 の 崇 高 さ

法 然 上 人 詠 歌

中 村 辨 康

池の水おのがこゝろに似たりけり

にごりすむことさだめなければ

——續後拾遺集——

八風に左右されて

此歌は法然上人が或る時、賀茂の河原屋に居られ、庭の池水をつくづくと御覽になられての御感懐と云ひ傳へられて居ります。

尤も續後拾遺和歌集には卷の第十九釋教歌の下に「題しらす」源空上人として

我がこゝろ池水にこそ似たりけれ

にごりすむこと定めなくして

と出て居り、多少字句が置き替られてありますが、意味には變りもなく何ちらでも差支へないと思ひます。

ほんとに人間の心と云ふものは此お歌の通りだとつくづく感ぜさせられます。

私達は常に毀譽褒貶利害得失の八風に左右せられて居ります。

悪口言るれば悲しみ、褒めらるれば喜び、得れば喜び損すれば悲しむのは持つて生れた人情かも知れませんが、それでは餘りにも外界のなすがまゝに躍らされて居ると云ふものです。結局私達の喜怒哀樂といふものは、目に見えな

い悪戯者の悪魔の、ア、ツ、リのまゝの影法師なのです。

されば「心の師となつて心を師とせざれ」と古人も教へて居りますし、善導大師は凡夫を形容して「輕毛の如し」とも云つて御自分を反省して居られます。

子供の時分によく冬の風のある日など、鶏の綿毛を舞はして遊んだものでしたが、あの風のまにまに飛んで行く輕毛の姿こそ、私達の現實の姿ではないでせうか。

情けない私達です。イヤ情けないのは私達の心です。

それでもまだ之れを反省して行ける人はえらいと思ひます。多くは無反省のまゝに、定めない心にあやつられて一生を終るのです。

怒つたり泣いたり笑つたり、心の動くまゝに躍らされて居ながら、しかも他人の怒つたり泣いたり笑つたりするとを、えらさうに批判して居るのです。

こんな話があります。

或る人が釣をして居ました。何うした譯か其日はちつとも釣れません。

それをまた見物して居る人があります。

釣る人も釣れるか釣れるかと魚の餌に寄るのを一心になつて見つめて居ります。

見て居る人ももう釣るかもう釣ると、之も一心になつて水面と釣師の手元とを見つめて居ります。其辭、用事を控へて急がねばならぬのに、

「一度だけ釣るところを見てから……」

と、それに引かされて居るのです。

それをまたつくづく眺めて居た人が云つたさうです。

「何と云ふ間拔けな人達であらう。私はつきから小半日もかゝつて見て居たが、釣師の方も小はぜ一つ釣つて居ないし、見て居る人もまた何にも釣らなハのを丹念に見物して居るのだから世話はない。丸で阿呆の寄合見たやうなものだ」

と。然し自分は何うだつたのでせう。釣を見物して居る人をまた小半日もかゝつて丹念に見物した居たのですが、自分の阿呆には氣が付かないのです。他人のことよりも先づ我身のことを反省したらよいでせうと思ひますが、さて自分のこととなると中々氣が付きません。

それが私達なのです。

しかも八風に左右されて行く私達です。

それで居て中々剛情張りの處もあります。

「若し若しあなたの御顔に墨がついて居りますよ」

と注意されたら屹度、「どうも有難う御座います」と御禮を云ふでせうが、若し、「あなたの心に垢がついて居ます」と云はれたら、「人を馬鹿にして居る。失禮な」と、ムキになつて怒るでせう。

顔に着いた墨などは何うでもよいことです。

それよりも心についた垢の方が重大問題で、それこそ本當の親切がなくては注意されないことなのですから、大いに感謝してよい筈ですのに、心がかたくなで素直でないから、すぐ本當に腹が立つ譯です。

全く反省が足りないのです。

畢竟は自分が「心の師」になつて居ないからです。當にならぬ心を主として、自らを心の師として居ないからです。かくして私達は反省することもなく、また反省を促されることをも嫌つて、唯だ八風の吹くまゝに翻弄されつゝ一生を終つてしまふのです。

清濁を抱擁して

佛教では、心を色々なものに譬へて居りますが、中でも「意馬心猿」と云つて猿に譬へて居るのは有名なことです。

「心猿」とは、人間には六つの窓があつて、心の猿がチョイチョイ其窓から窓へと飛び廻つて居ることを云つたものです。即ち眼の窓、耳の窓、鼻の窓、舌の窓、身の窓、意識の窓の六つの窓を恰度猿が枝から枝へ飛移るやうに飛廻つて居るのが、私達の心の状態だと云ふのですが、本當によく譬へたものです。安樂集の上に

「諸の凡夫の心は野馬の如く、識は猿猴よりも劇しく六塵に馳騁す」と云つて居るのも夫れです。

猿は利好さうに見えても謂ゆる猿智恵で、尻が抜けて居ります。目先だけで本當の遠き慮がありません。唯だ貪欲だけでお腹が一杯でも食物を口の中へ頬張つて居りますし、痴情にも勝つて居て嫉妬深いやうです。

人間も猿から進化したと云ひますから、教養なき時はつひに猿に歸るのでせう。する事なす事かなり猿に似て居るところがあるやうであります。

然しまあ、そんなことは何れともあれ、私達としては心の猿を制御しなければ、本當の人生を現はすことが出来まいと存じます。

そこで佛教では「戒」と云ふ綱でしぼるか、または「信」

と云ふ淨化作用でそれを清めしむるかの二途を教へて居るのです。

戒のことは暫くおき、誠に信仰こそは私達の心を淨化して呉れる最も有効なものです。

法然上人が此歌を詠まれた時の心境は、果して何んなであつたでせうか。それは法然上人其人でないから、本當のことはよく判りませんが、恐らくは人間一般の氣持に清濁定めなき池の水を引き比らられたものでありませう。

然し、私達としては、私自身の心の清濁定めなき姿を、此お歌に依て今更乍らに反省したいものだと思ひます。

私達は凡人です。聖者ではありません。

聖者なればもう信仰の必要はないと思ひます。

凡人なればこそ如來様の御名を戀ひ慕ふ譯です。拙き者

なればこそ御名を呼ぶ自分の聲を通して、私の凡情を淨化

し、永遠の貴とさを希ふ譯です。

世には信仰に入ると宛かも聖者にでもなつたかの如く思ひ違ひして居る人もあるやうです。

そんな事はありません。凡夫は凡夫です。やはり五欲に流がされ八風に吹かれます。

五欲とは食欲、睡眠欲、性欲、財欲、名譽欲で、初めの

三欲は生物共通の本能であり、あとの二欲は文化發展につれて進化され行く社會の中に生活すべき、むしろ必需的な人間特有の欲望なのですから、若し之が無くなれば乞食するより外仕方がないかも知れません。

少くとも「捨家棄欲」と云ふ僧侶本來の建前から行けばあとの二欲は抑制すべきものでもありませうが、人間生身の身體を持つ限り前の三欲は必ずあるべき筈のものです。

但し第三の欲は謂ゆる「五蘊盛苦」であつて、之を制御することが修行道の最頂點でもあつた譯ですが、如何に多くの人々が悩み、如何に多くの聖者達が耐えに耐えて來たか之に關する戒律の箇條の多い事を見ても、凡そ想像され得ると思ひます。

とは云へ、それも一生を無妻無欲で通す持戒者に限られたことでありますが、その人にしても、食眠の二欲だけは何うする事も出来なかつたことでせう。

況して其他の毀譽褒貶の風に吹かれた時、何で心の動搖しない事が有り得ませうか。

十何年か前のことです。思ふところあつて壹年半ほど毎月一回宛自分の寺の檀家の佛壇の前で念佛させて貰つた事がありました。無論自分の修養の爲ですから無料奉仕で、

決して御禮など頂きませんでした。次ぎから次ぎへ移つて其家々の佛壇の前に坐する時、感じが一々に違つて來るのです。留守の家もあり子供ばかりの家もあり丁寧に挨拶する家もあり不愛相の家もあり夫れは夫れは千差萬別でありますけれども、そんな問題よりもむしろ其家々の佛壇から受ける感じの方が、全く色々に異つて居て、心から念佛の出來る家と、何うしてもシツクリ念佛の出來ない家とあつて困つたのでした。「之ではいけない。念佛は如來様に對して稱へて居るのだ」と、いくら自分の心に云ひ聞かせても何時も同じやうな眞摯な氣持にはなれませんでしたので、つくづく自分の精神力の拙なさにあきれたのでした。

何と云ふつまらない心なのでせうか。

こんな些細なことにまで、私達人間の心は左右され亂されて行くのです。

夫れは畢竟道德的な氣持からであり、また修養を專一とする者の反省からであります。宗教は決して或る一部のものの獨占すべきものでありませんから、如何なる人にもまた何んな場合の時でも容易に行はれるものでなくてはなりませんとすれば、五欲に左右され八風に吹き流がされて居る中からも、永遠のいのちの中へ衝き進んで行けるも

のでもなくてはならぬと思ひます。其處に法然上人の宗教の重要性があり特異性があると思ひます。凡てを抱擁してしかも眞實に進む道です。

一切を反省して

何事でも現實をよく反省して行く事が大切です。

反省あるところには、必ず研究があります。反省あるところには、必ず進展があります。反省すれば苦しいかも知れませんが、其苦しみを脱却しやうとするところに研究があり、研究するところに改善があり、改善するところに進歩があるからです。

池の水が雨水の爲に濁らされ、または子供達のいたずらの爲に濁らされ、或は木の葉に汚され、鯉の餌をあさる動きに泥をかき亂だされることは、清冽なすき通つた水を湛へて居る時よりも、若し池に人間のやうな感情があつたとすれば屹度悲しむ事でせう。

イヤ流れの急な川ならいざ知らず、既に池である以上、底には泥がよどんで居る筈ですから、そつとして置けば水も澄んで見えることでせうが、元と元と濁りを底に持つて

居るので、ともすれば濁り勝になるのは當り前の事です。

清いまいにそつとして置いて呉れ、ばよいものを、雨水がかきまはし、子供がかき廻し、鯉がかきまはし、風がかきまはして、時々濁らせて仕舞ふのです。

悲しい事です、是亦た止むを得ない事です。

元と元と泥が底に淀んで居るからです。

法然上人は

「欲界散地に生を受くるもの、心豈散亂せざらんや。煩惱具足の凡夫いかでか妄念を止むべきや。其條は源空も力及び候はず」

と云つて居られます。

法然上人だつて人間ですから、父を夜討した敵定明の事も思ひ浮ばれたことでせう。故郷に淋しく死んで逝かれた母上の事もなつかしく思はれたことでせう。自分より先きに死んで行つたなつかしいお弟子達の事や、遠國に居る同信の人達の起居や、其他たよりもきかぬ誰れ彼れの身の上なども思ひやられた事でせう。

「其條は源空も力及び候はず」

誠に人間法然の姿が眼の前ににじみ出て來ます。

然し其處には反省があつたに相違ありません。

「たとへ妄念が起つても夫れに氣が付いて正念に立ち歸つたらよいのだ」

とは色んな人に話された御言葉でした。

和論語の中に

「佐々木四郎高綱、遁世して高野山にありしが、ある時京へのほりて、源空上人に逢ひて問ひけるは、念佛のとき、ねむりに犯されて行を怠り侍ること、如何にして此障をやめなんやと尋ねしかば、上人、目のさめたらんほど念佛し玉へと申されし」

と云ふ話をのせて居りますが、目がさめたらいいのであり氣がついたらいいのであり、反省して正念に歸つたらいいのであつて、一切を肯定しながら然かも一切の上に反省を怠たらない事こそ、本當の凡人としての信仰生活の姿ではないでせうか。

この法然上人の唱導せられた信仰こそは、誠にスラスラと、一切にこだはらない素直さの中に、しかも反省しては熱心に眞實を求めて行くものであつたのです。

なつかしい法然上人！ 平凡の中の崇高さ！

これこそ私達凡人の宗教です。イヤ一切の人間の踏み行くべき道です。



説小

廣東の商人たち

荒井 新
大羽比羅夫 畫

—

その頃の廣東の市街は全くお話にならないほど汚らしかつた。街は塵芥や悪臭がムツと鼻を突いて、街のところ嫌はず乞食や大道商人がデコボコした石の舗道に店を擡げてゐた。こうした狭苦しい路地が、この市街の舊城内には縦横に交錯して、家々は竹の簾を張り廻らして夏の強い日光を防げてゐた。

そして、棺桶屋、居酒屋、肉屋、靴屋、呉服屋、金物屋、鐺物屋、扇屋、家具屋、玉屋などがこの路地にはごみごみならんでゐる。その迷路のやうな路地を辨髪を垂らし額をテラテラと剃り込んだ人々が歩いてゐた。

張濟堂の店はこのごみごみした路地の中の居酒屋の隣にあつた。萬金銀細工品、刺繍品、古代絹、數珠硬玉、佛像などと書き並べたつるし看板がさげてある店は、黒櫃の扉で閉めきつて、店の左手に卍形の格子戸がほんの僅か開いてゐた。扉の前には青銅の出た鐘がさがつてゐて、その紐がだらしなささうにぶら／＼してゐた。

或る残暑の酷しい九月の晝前、張が朝飯を食べてゐると、店の鐘がカラーンと鳴つた。恐らく客だらうが、張はその音を聞くと眉をしかめた。彼は朝めしをいつも十一時頃に喰ふ習慣だつたので、晝前に客が來るとたまら

なく不機嫌になつて決して店へ出なかつた。

「朝つばらから贅澤品を買ふなんて奴には口クな者はありやしないさ、ひやかしか、盗人の買出し位なもんだ」ととんで相手にしなかつた。張が黙つて朝飯を續けてゐると、カララーンと今度は少し大きく鳴つたので、張はしぶしぶ温い湯氣を立てゝゐる飯の皿から箸を放してだるさうに立上つた。

そして、薄物のシャツを太つた襦袢の上にひっかけボタンをはめると、ゆつくりと店の方へ歩いて行つたが、扉へ眼もくれずに、肥形の格子窓にチョツと手を掛けると心持ち踵をもち上げ眼を細くして表を覗いた。張はいつも、どんな客が來てもすぐ扉を開けなかつた。きつとこの肥格子から覗きみをして、人相や風體がいゝか悪いか、金持らしいかどうかを見極めてから、ゆつくり扉を開けるのである。張は例のやうに窓越しに表をみると、すでに客らしい男は街を横斷つて歸るらしいが、その風體からみて張は金持大人だなどピンと來たので、「もし」と大聲で呼び止めやう

としたが、筋向ひの商賣敵の李福の店に行きたいので、彼は周章て口に手を當てて居間にもどつた。

あいつの店で買ふなら買ふがいゝ。きつと古着や、この間南京邊りで作られたばかりの古代佛像でも買はされるのさ！ 李福！ フンなんておよそ嫌な名前さ。彼はこの名前に唾をひっかけたい程だつた。昔から「同業は相互に憎み合ふ」と言ふ言葉がこの國にはあつた。しかし、實をいふと張と福とは長い間肝膽相照す親友だつた。それがこんなに憎しみをもちやうになつたのは、張の娘の明のことからだつた。

明は死んだ女房の遺して行つた目の中に入れても痛くない程可愛い張の一人娘だつた。十九に成つた明は全くすばらしい美人だつた。張によくあんな娘が生れたもんぢやなと、街の商人達は褒めたり、くさしたりする程、明は年頃になると日増しに美しくなつた。「ホホー、こりや傑作じゃわい！」と張自身もつくづく娘に見とれることもあつた。

明はその頃街の人達から「敦煌美人」と渾名されてゐた。と言ふのは或る時張の店に來た金持大人のお客が、店に坐つてゐた張の娘明をみて、「こりや中々の美人じゃ、まるで敦煌壁畫から抜け出て來た様だ」とほめちぎつたのを、宇頂點になつて喜んだ張が娘の話が出ると必ず家の娘は敦煌美人の類だよなど吹聴したからだつた。明はそれ程に美しかつた。目が幾分か細目に切れ上つて、眉は細く、黒い瞳、線のはつきりした小さな唇、下ぶくれのふくよかな頬などは、唐美人の美しさを具へてゐたし、キメの細かなめらかな艶々とした健康さうな膚は明を一層美しくさせてゐた。

李福にも一人息子の泰安があつた。泰安は張の娘明よりは二つ歳上であつたが明とは幼な友達だつた。この頃では泰安と明とはすっかり大人っぽい氣持でお互に愛するやうになつてゐた。泰安は親父がきつと明を嫁にもらつてくれるだらうと考へてゐたし、明は明で父親がきつと泰安へ嫁入りさしてくれると思

つてゐた。だが——その頃廣西の方から某將軍が軍隊をつれて、この市街に半年ほど前から入城してゐた。そして將軍は北伐の策戦を回してゐたのだ。この將軍の幾人かの息子の中一人、王龍は手に追へぬ道樂者だつたが、士官として父の將軍に従つてこの街に来てゐた。張の娘は可愛さうにもこの王龍の目に止つた。

東 廣 止つた。
そして、間もなく張と娘の明は將軍から呼び出されて、明はその日から無理矢理王龍の側女とならされてしまつた。明は泰安のこと
人 を思ふと居ても立つてもをられぬ程にもだへ
た るのだつたが、將軍の力にはどうしやうもな
ち かつた。だが父親の張は、將軍のところに娘
— を置いてそそくさと歸つて來ると、居間にど

つかと脚を組んで、娘の氣持などは一尙お構ひなしにホクそ笑ひをしながら「さア、俺の娘も大したもんぢやいッ！ 將軍の御子息様の夫人だどな！ これで俺も肩身が廣いと言ふもんじや、やつぱり娘は美人をつくるに限るて……」と獨言を言つてゐた。

しかし、一月ばかりたつと娘の明は將軍のところから逃げる様にして歸つて來た。張は娘の顔をみるなり「不幸者めッ！ 何故歸つたッ！ 親の氣もしらないで」とどなり散したのだつた。だが娘の話を聞いてそれが満更嘘でない事が分ると娘をどなりつけたことが氣の毒になつた。明の話はこうなのである。

明は王龍の側女になることが、父親が言つた様に唯一の親孝行であるなら、死んだ氣持になつて泰安のことや何もかも諦めて王龍に仕へやうとさへ考へた。だが明が行つてから二三日すると王龍はもう他の女を引き入れて來ては、自分の前で眼を被ふやうな淫らなことをした。明はそれ丈ならまだ我慢しやうとさへ思つた。けれどもつと辛抱の出來ない現實にぶつつかつたのだ。それは明が王龍のところへ行つてから一週間と經たないうちに、父親の將軍が執拗に自分にせまつたからだつた。將軍は自分の息子の前でも平氣で明に淫らなことをしやうとしたので、明はその度に分分の信仰する千手觀音のお姿を念しながら

ぶる／＼震へながらも、上手に突張ねてゐたが到頭飛び出して來たのだつた。

張は娘を慰める氣持で「將軍の息子でいけなけりや、今度は大金持の奥方になるさ」と言つて大やうに構へてゐて、明が恐れてゐた將軍の仕返しのことなどはちよつとも氣にしてゐなかつた。

明が歸つて來たことが分ると泰安はホツト安堵の胸を下ろした。だが、一月ばかり會はなかつた間に、明はひどく艶々として、まるで別人のやうに色つぽく見えたので、泰安は驚いた。そして明と會ふ毎に彼の懊惱は重くなつて行つた。「もし今一緒になつてしまはないと、明は父親の言ひなりにまた何處へ嫁に行くか分らない」と考へると、泰安は到頭我慢しきれなくなつて、父の福にやつとの思ひで打開けた。福は息子の願ひをもつともだと思へたので早速張のところへ飛んで來て明を嫁にもらひ度いときり出した。

だが張は自分の娘は絶世の美人だと信じきつてゐるし、將軍のところからさへ申込んで



来る位だから、酔狂でも明が福の息子など、そんな仲になつてゐやうとは夢にも思つてゐなかつたので、張は「フン、はばかりながら、あんたの息子さんは明の婿になる柄じやないて」とあつさり遇つてしまつたから、福は大憤慨してしまつた。

俺は何もハッキリ断つたわけでない。たゞ娘の將來や自分の利益などを考へに入れたまでなのだ。だから絶交したのは向ふの勝手さ。……張はかう考へたが、それから張も福も道で會つてもろくな挨拶もしない仲とな

つてしまつた。また福の息子は通りに餘り姿を見せないやうになつたし、娘の明は明ですつかり性質が變つて、不貞くされては張に當り散らしてゐた。

張は色々考へるともう朝飯を食べる元氣もなく、すつかり憂鬱の虫にとりつかれてしまつた。それでも張はやつと氣をとりなほして、食後のお茶で唇をしめらかしながらゆつくりとゲツプをして、立ち上つた。(續く)

法然上人鑽仰會發行

信 仰 讀 本 定價二十錢 送料三錢

法 然 上 人 法 語 抄 定價三十錢 送料六錢

法 然 上 人 定價十五錢 送料三錢

法然上人の信仰生活 定價三十錢 送料六錢

講話一枚起請文 定價三十錢 送料三錢

念 佛 讀 本 定價二十錢 送料六錢



宗良親王御潜匿の聖地趾
妙法院寺領福田莊（本文參章）

宗良親王と越中國

越中宮奉讃會理事長
安養山極樂寺住職

荻行密岩

越中宮宗良親王は元徳元年御齡十五歳、父後醍醐天皇の勅を奉じ門跡に御入室あり、妙法院尊澄法親王と申し、後第百二十代の天臺座主を繼がせられた。當時北條、足

のである。越中國に御潜匿し給ひし親王、當時の御事蹟を偲び、親王の御精神が顯揚されしは幸ひである。

○

利の叛臣醜慮が相踵き、龍駕南巡天位を漸く保せられ、親王又これを慨し元弘元年山門の衆徒を督し御兄尊雲法親王（護良親王）と唐崎に錦旗を翻へされ爾來聖戰五十餘年其の御一生は義烈悲壯、史を讀むもの怯夫をして感奮興起せしめ、近江、遠州、信濃

延元四年宗良親王は久しく住み馴れ給ひし遠江國を後に、所定めぬ旅衣に身を襲つし、駿河國に赴かせ甲斐を経て信濃國に御移り給ひ、下諏訪の大祝賴繼の許に着かれた。

上野、越後、然して越中に轉戦、皇業回天の偉業を企だてられ、流離潜匿備に辛苦を嘗め給はれた。殊に、越中に於ける親王は南朝方を鼓舞し遂に越中の南朝方は兩朝合一後も猶ほ膝を足利方に屈する事を潔よしとせず、大いに義憤を洩し義を北陸の天地に唱へる素志を醸生せしめる起因となつた

諏訪の明神に戰勝を祈られ、暫時この地に居られたが、信濃國の守護小笠原貞宗が襲ひ來たので、親王は又た長く諏訪に駐り給ふ事が出来なくなり、興國元年の冬諏訪を出て、越後國に移り給ふた。同二年越後國寺泊といふ漁村に御移り給ひ、豪族五十嵐、池、風間の諸族に頼られ、菊屋の館に駐り越後の南朝

方の志氣を鼓舞し、賊將上杉憲顯と戦はれしが、敗れて戦死をするもの三百餘人、南朝方の諸城は相次いで陥落し、形勢愈々不利となつたので、親王は興國三年の春、越中國に南朝方に志を通ずるものと聞召され、贈從四位石川飛騨守義純の嫡男義昌を始め、大厩、七高、車、庄司、柴、荒木の扈從の臣を從へられ、北越の荒海を航し越中國名子の浦に御着船あり、石黒越中守重之の館に入り給うた。

名子の浦は現今の新湊町、堀岡、牧野の諸村の一帯で、同地は越前國氣比神宮（官幣大社）の所領關係があり皇室の御領に屬してゐた。石黒氏は藤原利仁將軍の遠裔で中田川の龍神が黒石珠一顆を獻げしにより石黒氏と稱したと傳へ、一族は勸皇精神に篤かつた。石黒氏の一族は礪波地方に繁榮した豪族で、宗家は礪波郡貴船城に據り、その支族は、福光、或は淺井城に、その他礪波の各地に蕃延した。壽永の昔、木曾義仲の義軍に投じ源平俱利伽羅山の合戦に隨名を馳せた石黒太郎光

弘の末裔で、親王の精神が篤く、殊に石黒三郎は承久三年加越兩國の豪士を叫合し七百餘名と共に志保山口（加越國境）の切所を防いだが衆寡敵せず、大軍に抗する能はず遂に北陸道より賊軍を上洛せしめた。

親皇誠忠の血潮は石黒累代に脈々と流れ、重之も亦親王の御不運をいたく慟き御庇護し奉つた。當時名子の浦には奈良黨の姫野一族、牧野氏等（稻上とも稱した）が親王を勞り給へらせ、石黒氏を始め扈從の臣、石川氏等と講らひ、礪波郡福田莊（射水郡佐野村）の假御座所に移らせ給ひ、暫時同地に藩置し給うた。同莊は親王が門跡であらせられた比叡山五門跡妙法院の寺領で、同地には山王七社の十禪師明神を中心し西光寺、西念寺、廣濟寺、正教寺、專稱寺等の天台四十八坊の寺院があり、この由緒地へ前門跡であらせられた宗良親王を御迎へ奉つた同莊の社人、社僧は篤く親王を御庇護申し奉つた。

妙法院とは叡山門下の門跡寺院で、栗田の青蓮院と相並び、洛中に接して寺域を有する

聖に於て、政治的にも頗る重要な意味が含まれた寺院で、その門跡に政治的に必要を伴ふものがあり、これは宗良親王の御前住として尊雲法親王（即ち大塔宮護良親王）が御住職であらせられた所である。恐らく宗良親王はその尊雲法親王の御後を承けて法院門跡になり給うたものと思はれる。同莊内の山王七社の十禪師明神に皇道恢復を祈らせ給ふて

興國三年越中國にすみ侍りし頃、關中百首よみ侍りける歌の中に神祇をかぞふれば七とせも經ぬ頼み來しななの社のかけを離れて

と、御歌を詠ませられ、同明神に納め給ひ、天台座主であらせられた御當時を回顧されたものと御家集李花集に見ゆるところである。その後、名子の浦（牧野村）では重之を始め石川その他の扈從の臣、姫野一族、牧野氏等は土人と協力し丸木を以て新らたに御座所を營み親王を同所に迎へ、郷人等は自作の穀物蔬菜を獻げて朝夕恭敬し奉つた。親王は草深い邊陲な地に御藩置中は効に越

中の越中地方を破舞し給ひ又二塚村に出て逆賊名越時有の毒刃に罹り給ひし、恒性皇子（後醍醐天皇の第十五皇子）の御墓を弔ひ悲憤の涙に袖を絞らせられた。宗良親王は名子の浦なる牧野の郷に御潜匿中は一に佛教を通じ大義名分を明らかにし皇業恢復の策源地たらしめ且つは結縁菩提の爲め、此の地に佛教遊行の道場を建立の御思召あり、令旨を下されたので、石黒、牧野の諸士を始め、扈從の石川、大西、車、七高その他の者等は、この旨を奉じ東奔西走し御座所近くに繩張りをし工事に着手した。これを聞き傳へた遠近の善男善女は群り集り、數百の結縁の人々は十數町隔てた北方の濱から土砂を運び、さしも難工事も易々と進め、遂に牧野の郷に一大堂塔伽藍が建立された。法昧を獻げ御遷佛御供養には親王御自から御導師に立ち親修され、香煙はたなびき、鑪金の響は同心稱名の聲に和し頗る盛儀を極めた。親王はかくして自から開山となり、安養山極樂寺と名づけ給ひ、給旨を下して禁裏内道場と定め越中一國を限り一戸

毎に炊米一升宛を上納せしめられた。後世同寺は兵燹に罹り赤丸、守山に移り今は高岡市に嚴存し、寺の礎は寺端と稱し下牧野村に遺つてゐる。又親王が御潜匿中、或る日立山の雪を望みて

故郷の人に見せはやたち山の千とせふるて
ふ雪のあけほの

玉くしげ二上山を見るたびに都のふじとお
もひわびぬる

おもひきやいかに越路の牧野なる草の庵に
宿からんとは

今は又とひくる人も名子の浦潮たれてすむ
蛋とはしらなん

と、御詠ませられ、後世下牧野村に雪見岡と稱する小丘ありて今尚その遺蹟に筆塚及與瀨井を傳へ、一株の老樹は宇御車留に風颯と徐ろに當時を語り、更に御歌碑を其處に樹て記念し奉つてゐる。親王の御遺物を又汚瀆せんことを怖れ、悉皆埋めて土盛をし黒木塚又不削木塚と呼んで餘光を偲び、記念の孤松一株寂しげにその目標となつて守護し奉

つた。

文化三年五月、上牧野村長藏寺の住職、親王御事蹟の湮滅を恐れ、江戸の儒者源保昇鶴が高岡に遊學せし際に碑文を乞ひ撰館塚と命名しこれを僧金森瑤に讀書せしめ碑銘を石に刻み同七年の冬、これを塚の頂上に樹て「八宮撰館塚」と今尚遺つてゐる。扈從の臣荒木八郎は親王の御遺徳を偲び庵内に廟を建立し御靈木主を尊崇したが明治七年後代の彌三郎氏は神靈を封じ牧野村七ヶ村の守護神とし今尚地方民の尊崇の的となり、後神爾社と公稱し村社に指定され意らず奉祀されてゐる。親王、越中に御動座中は、重之の據れる礪波郡貴船城、或は一族石黒次郎光景の淺井城（同郡赤丸村）の兩城に玉趾を駐めさせ給ひ、淺井神社に戦勝を祈願し、又同地方で加茂、八幡、山王等の七社を勧請され、又石黒郷内二十四ヶ村の者の志氣を鼓舞して専ら吉野朝廷へ志を通せしめ遂に水波兩郡に及び衆民恭敬庇護して財物を奉つた。西野尻村の眞言宗名利安居寺の正聖觀世音に親王は歸依し

御參拜の跡りは同寺に御逗留ありしとも傳へてゐる。

親王が越中國に御動座し給ひし興國三年は父帝後醍醐天皇の御三回忌に御相當するのて、牧野の郷より程遠からぬ開發村に御靈堂を建立し、七々日の間、齋戒沐浴し一心觀心し天皇の御尊像を御刻み給ひ、又千體佛を供養し御菩提を弔はれた。今にして高岡市開發町には村社熊野神社に御尊像を御神寶として傳後醍醐天皇の御宸筆

宗良親王より扨從大西佐渡へ向ふ（富山縣新湊町大西利吉氏所藏）

奉祀してある。

親王は越中の風光を愛し蜀中百首の御歌を詠ませ給ひしと傳へてゐる。その御詩藻の豊かさは、御生れながらに備へ給ふ天稟であつた事は申すまでもない。歌人であらせられた親王の御家集李花集は後鳥羽院の新古今集以來の最大なる作であらせられるのみでなく、建武、延元、興國、正平、天授等の時代に專門文學者としての爲世、爲定、兼好、頓阿、良基等の作品等は月明の夜の露星の如く光を失ふものである。御家集の李花集は上下二卷

よりなり、春夏秋冬戀雜の六部門に別れ、主として親王の御歌を收めてある。それらの御歌は軍旅の中に征衣の袖を濡らし、矢叫びの中に軍馬を勞り、數奇な運命の儘に遠信甲越の彼方此方を歩き給ひて、御席の温るを覺えぬ位に軍事にいそしみ給うた。けれどもそれがため御詩囊はます／＼膨らむのみであつた。李花集の一巻の中には幾首かの越中にての御歌が收められてあり、又幾首かの見知らぬ越中の山河に感動されて御詠めになつた御歌がある。今それらの御歌を李花集から拾ひあぐれば

興國三年 越中國名古といふ浦に忍びてすみ侍りし頃、都へ行く人のありし假宣に、やよひの頃には爲定卿もとへ申し遣はし侍りし

いたづらに行きてはかへる雁はあれど都の人のことづてもなし
今はまた訪ひくる人も名古の浦にしはたれて住むあまと知らなん
返し

なつたけりしは中へ
くくくくくくく
二二二二二二二

音になけはそれとはきかで行く雁にことづ
てなしと何おもふらん

あゆの風はや吹きかへせなこのあまのしほ
たれ衣うらみ残さじ

あなじくは散るまでを見て歸へる雁花の都
のことを語らん

歸る雁越路の嶺のへだてをも我越えてこそ
思ひ知りぬれ

思ひやれ都の空も雁なけば獨りこしちの跡
のさびしさ

都にやおなじ空とも眺むらん我は行衛も浪
の上の月

都にもしぐれやすらん越路には雪こそ冬の
はじめなりけれ

雪つもる越の白山多深し夢にも誰れか思ひ
おこせん

何ゆるゑに雪見るべきもあらぬ身の越路の冬
をみとせ經ぬらん

今ぞうきおなじ都のうちにては心ばかりの
へだてなりしを

心地には潮のみちひもなきものをいかなる

袖の恨みなるらん

よしさらはかくて有磯の浪による浦の藻屑
と身をやなさまし

と、數々の御歌を詠ませられた。
かくて越中國も親王を永く庇護し奉る可

き土地でなかつた。興國四年の秋の頃、親王
は再び信濃國に赴かせ給ひ、北條時行、諏訪

大祝時繼の奉ずる所となり、香坂高宗の大川
原の嶺に據られた。その後親王は正平七年征

夷大將軍の宣旨を蒙り、東國の軍事を統べし
められ、そこで親王は香坂、仁科、諏訪以下

信濃宮方を従へて上野に進發し、新田氏の一
族と兵を合せて、武藏國に進みこの總勢十餘

萬騎と稱せられた。足利尊氏は鎌倉にあり急
を聞き出陣し、畠山、今川、仁木、岩松の諸

將これに従ひ神奈川に陣を布いた。新田氏の
一族は進んで小金井に陣し、親王の本陣は小

手指原にあり、茫々たる武藏野平原、旌旗遠
く連なりて、甲冑、劔戟相映じ十餘萬の人

馬意氣、將に天を衝かんとした。親王これを
觀望して勇躍禁せず左右を顧みて一首の御歌

を詠み給うた。

君が爲め世のため何にかおしからむすてて
甲斐ある命なりせば

と悲壯淋漓、宮方の軍、士氣爲めに奮ふこと
一層であつたが、南朝方の軍遂に利あらず敗

績し親王は信濃國大川原に再據された。その
後、越後、信濃の賊軍と戦ひしもまた敗退の

やむなきに至つた。この合戦の後には、信濃の
宮方の主力であつた諏訪氏は分裂し、その一

派は賊軍の守護小笠原氏に款を通ずるやうに
なつたので愈々大川原に籠居の日を續けられ

た。その當時の事を李花集に
信濃國伊那と申山里にとしへてすみ侍し

かば、今はいつかたの音信もたへはてて
同じ世にありともきかれはやなどおぼえ

し頃よみ侍りける
我を世にありやと問はば信濃なるいなと答

へよ嶺の松原
この御歌を拜誦する時、落葉なる御佗住居

を續けられし親王の御傷はしきさまが偲ばれ
て、私は常に泣かされたのである。然して吉

野朝の歴史は正平十六七年以後は殆ど史實は明らかでなく、宗良親王の御事蹟も亦同様であつた。長慶天皇御即位以後は、いよく南山の皇威は四方に振はず、僅に大和、河内、攝津、武藏と九州と越中の一隅のみにしてこれらの諸國は吉野朝廷の根據地となつてゐるのみであつた。天授三年吉野行宮に在らせら



(安養山極樂寺全景)

れた親王は再び信濃國に下向された。後河内國山田庄に在りて新集和歌集の撰集を完成せられ、弘和三年十二月これを長慶天皇に奉つた。その後の御消息に就いては漠々として知る由もないが、元中二年八月十日七十二歳を以て遠州井伊谷で御薨じ給へしと傳へるも明らかでなく、越中國ではその後親王屢々御再據し給ひて嘉慶元年三月二十一日御病に罹らせられ安養山極樂寺に御薨去し給ひ、釋號を佛眼明心法親王と申し奉ると傳説口碑が遺つてゐる。遠江國引佐郡井伊谷には親王を奉祀する官幣中社井伊宮のある事は人のよく知る所である。私は常に思ふ吉野朝廷は敗者であつた。併し大義名分を最後まで高潮せられた事は洵に崇高と云はねばならない。孜孜たる宗良親王の意氣たとへ素志が遂に達せられず草深き邊土の裡に薨去されるとも永く國民の仰望するところである。

(安養山極樂寺に於て、九月二十一日より二十三日迄、同寺開山宗良親王五百年大遠諱法要を奉修することになつてゐる。親王

に恩從した人々の子孫で現今知名の士としては石川日出鶴丸博士、石川旭丸博士、荒木彦弼中將等多く現存し、それ等の人士によつて、建武中興大座談會を催すべく準備が進められてゐる由である。——記者——

黍餅の訓

西國の大名某、江戸へ行く途中白隠禪師に謁して教へを乞ふた。丁度その折村の百姓の女が來て、黍餅を供養した。白隠禪師は直ぐそれを執つて、その大名に進めた。大名は食ひつけられないものゝことゝて、食はずに辭退した。その時、白隠は辭を荒らげ

「是非共これを食べて頂きたい。これを食べれば始めて小民共の疾苦を知ることが出来るのである。わしが貴方に教へやうと思ふのは實にこの事なのだッ」これを聞いて大名は大いに感謝しその餅をしみぐと食はつた。



芙 蓉 散 華

吉 田 絃 二 郎

このごろは無朝庭の隅に芙蓉が咲く。
芙蓉を手折つて朝ごとに佛に供へる。

「生きてゐてくれたら」とその清楚な芙蓉をさゝぐることに
思ふ。凡夫の癖きである。

親を失つた子、子を失つた母、妻を失つた夫、みなそれぞ
れの悲しみを抱いて芙蓉を手折るであらう。庭の隅から芙蓉
を手折つて芝生の上を歩きながら、佛間の方を見れば蠟燭の
火がまたゝいてゐる。香煙も立ちのぼつてゐる。

朝ごとに露を踏み花を手折つて亡き佛に供へる秋のわびしさ
は骨を削る。

たゞひとり生き残る者の悲しみを幾年耐へなければならぬ
のであらうなどとも考へる。

しかし、死にもせで秋の風に吹かれながら故人を悲しみ、

香華を供ゆることをゆるされてゐる果報を思ふこともある。

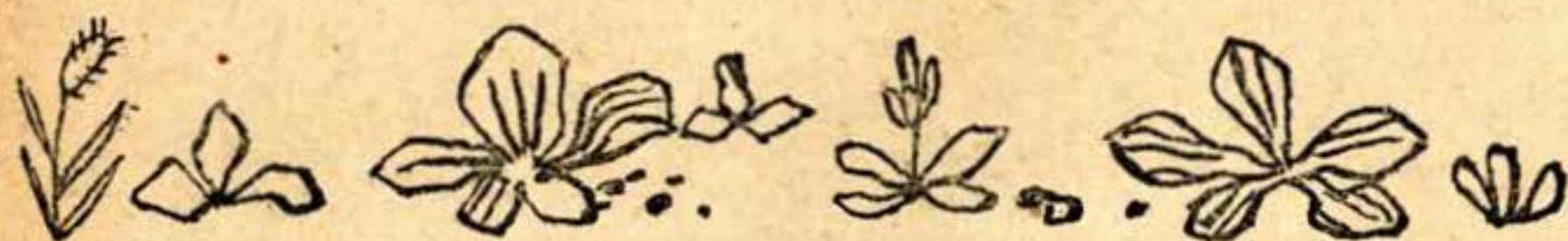
裏庭の竹山にも鳴が鳴くやうになつた。こほろぎの音も幾
分衰へて來た。

竹山の中を歩いてゐると、藪の小蔭までがなつかしまれる
やうになつて來た。

畑の紫苑も咲き、芒の穂もすがれはじめた。玉蜀黍や茄子
のこの程の嵐で地に叩きつけられてゐるのも一層ふかく秋を
感じさせる。

畑の中に立ちどまつてわたくしは秋晴れの空を眺める。空
は深く、遠い。空を眺めてゐると一層身を削るほどに孤獨の
秋が感じられる。

寂しさを樂しむといふ境地は芭蕉翁あたりの俳人の心であ
つたやうだ。西行も亦さびしさなくばうかるべしといふ心に



住してゐたやうだ。

わたくしはそのやうな寂しさを樂しむことのできる人をうらやましいと思ふ。そこにはまだ心の生活のゆとりがある。遊びがある。今のわたくしには寂しさを樂しむといふやうなゆとりはない。凡夫のわたくしにはたゞ寂しさの悲しみのみがある。身を削る寂しさのみがある。

芭蕉翁は一生を寂しさに徹し、寂しさを樂しんだ人である。しかしわたくしは寂しさに心を傷り骨を削りつゝある現在の凡夫たる自分の生活を農まうとは思はない。

寂しさに耐え、寂しさを樂しむ心は尊い。しかし寂しさを悲しむ、寂しさに骨を削る心も尊い。悟る心も尊い。しかし悟らで悲しみつゞける心も尊い。

悟り悟つて冷徹清高な聖の生活に住する人も尊い。しかも人間の悲しみの底に悲しみ貫く凡夫の生活も尊い。輕蔑しなければならぬことは悲しみを強ひて自ら忘れようとするものだ。悲しみを癡痺させようとするものだ。

一年有半、わたくしは庭を歩くにも、廊下を歩くにも、かつて一度も昔のやうに輕やかな足取りで歩いたことはない。わたくしは昔の輕快な歩み方を忘れてしまつた。

しかしわたくしはこのやうな生活を悲しまうとは思はぬ。たゞ一人生き残つてゐればこそ、朝夕に亡き人を悲しむこと

ができるのだ。亡き人のために追善を選び、墓を營むことができるのだ。そして現世に於けるすべての勤めを終つた日、故人のために一切の追善を果し得た日、運命がわたくしを待つ日、靜かにその後を追ふであらう。

わたくしは西行法師や、芭蕉翁のやうにすぐれた歌や俳諧は作り得ないであらう。しかし悲しみを苦しみ、悲しみに耐へるといふ點に於いては古人にも敗けないつまりである。そしてさういつた悲しみに徹して生き貫いて行くことがわたくしにあたへられた唯一つの途であることを信ずる。

今宵はこほろぎも家の中に入つて鳴いてゐる。古の支那の詩人は蟋蟀堂に入つて年まさに暮れんとすと歎じてゐるが室内にこほろぎを聴くやうになれば秋の心細さも胸を打つ。ペンを走らせてゐると燈を求めて机のまはりに草雲雀やきりぎりすが飛んで来る。

天涯孤獨の身には机のまはりに集まつて来る草雲雀もきりぎりすもなつかしい。通すべき言葉あらば草雲雀にもきりぎりすにも何とか聲をかけてやらうものを。

くさひばりわれも寂しいか部屋の間



今朝も裏の柚子の實が落ちてゐる。

表庭の柿の實も三つ四つ五つと落ちて、笹の葉の上に轉がつてゐる。

朝ごとに落ちて行く木の實を拾つては、掌に秋の靜かな感觸を味ふ。生きてゐるものゝよろこびだ。生きてゐるものゝわびしさだ。

秋のたゞ一と朝のみ生きのびることさへ限りなきよろこびだ。ありがたいことだ。言ひつくしがたきわびしさだ。

秋のたゞ一と朝生きのびることさへ限りない恩恵だ。三十年五十年の秋を生きることさへゆるされた恩恵に對して感謝すべき言葉もない。今こそ、いつ死が訪れて來ようともわたくしは靜かに感謝しつゝ合掌するであらう。

一日生きのびることのうれしさ。ありがたいさ。このうれしさを知り、ありがたいさを知るやうになつたこの頃、わたくしは一莖の草花にもかつて想像もしなかつた美しいものを感じてゐるやうになつた。

いつ死ぬも、いつ臨終を迎ふるも悲しくないと思ふやうになつたこのころは蟲の音にも、風の聲にも、草の葉色にも昨日にもまして心を惹かれるやうになつた。わたくしはやがて永劫にその草の葉とも、蟲の音ともお別れをするであらうと思へば、道傍にころがつてゐる一塊の土にもなつかしいもの

を感じずる。

一切の書翰も日記も、書物も、着物も、書置も、整理しなければならぬ。死支度をせねばならぬ。さういつた心が一日と強くなつて來る、しかし人間の悲しさ一本の筭にも、一枚の鹽甲の櫛にもかなしい追憶や未練が纏ひついてゐる。人間の心の弱さを思ふ。

x

庭の赤い辛夷の實が落ちはじめた。武藏野に集ふ渡り鳥の群の羽音を聴くやうになつた。二朝三朝と軒近く渡り鳥の羽音を聴けば、いつの間にか辛夷の赤い實はたいてい失くなつてしまふ。渡り鳥はうれしさに、あわたしげに鳴きつゝ、軒の辛夷の實を啄く。

信濃の高原に住んでゐたころも、秋ごとに木の實をあさり飛ぶ渡り鳥の羽音を故人とともになつかしく聴いたものであつた。渡り鳥の羽音は、秋の風にもまして寂然たるものである。落葉松の葉の落ちるころ浅間や八ヶ嶽を眺めつゝ信濃の草庵で渡り鳥の聲をしみじみと聴いた日を思ふ。

今日も辛夷の赤い實を眺めながらかつてありし信濃の草庵の日を想ふ。鳥の鳴き聲も、鰻の羽音も、原稿紙の上を走るペンの音も、正午の蟲の音も、魂の底まで沁みて感じられる。合掌してたゞ獨り生ることの有難さとわびしさを思ふ。



島根縣 井上雪枝

みいくさに征くは君なり君ならず

御稱名に抱かれし益良夫君ぞ

(評) 戦ひに行くものも送るものも大信念に徹したる安らかき見えて危げなし歌の調子又高く強くして人の心を打つ。

福岡縣 増谷千代

けなげにも若きわが子はほほえみて

稱名をよびつつ逝けるうれしさ

(評) 子を亡ひし親の嘆きはさることながらここにはそれを出さずみ佛を信じて上品住生した子の態度を喜ぶ親の渾められた高い深愛情が歌はれてある。

東京 大館銀月

酒煙草たちて妻帯見合せし木村一

郎も召され征きたり

(評) 一讀、散文のやうで斷じて散文ではない大御代の青年の心意氣を一氣によんで力強い。

富山縣 藤田四三句

家ごとに出でて軍馬のまぐさ刈る

この秋やよし空高く澄む

靜岡縣 一向山人

すめらぎのみたてとなりし吾子ゆ

きて秋ふたたびと其の母の云ふ

北海道 中村茂舞

家も親も忘れて征けと雄々しくも

はげます母は獨り佗び住む

東京市 小泉妙春

やぶれても母がかたみの衣ぞと

心をこめて秋の夜にぬふ

東京市 本條ヨシ子

嵐ふく夜半に灯をとりわが在れば

蟲の音きこゆ雨風のなか

京都市 永田七郎

よろこびを語る言葉の拙なきをし

みじみ思ふ秋となる頃

朝鮮 鹽江八年坊

出そろひし唐黍の穂を黒々と重げ

にゆする日の暮の風

福岡縣 増谷現傳

若くして逝きしわが子がめで弾き

しかた見の琴を見て母の泣く

福岡縣 益田牙谷

わが心いやしくなれる思ひあり此

頃歌を詠まず過せば

靜岡市 多々良登代子

家を捨て御國につくすますらをの

上を偲びて我れはつつしむ

愛媛縣 千葉長行

伊豫灘に隊をととのふ軍ぶね海の

護りのたのもしきかな

大阪市 渡邊澤泉

大君に召さると泣きてよろこびて

尊き道を説きし君はも

北海道 花田順經

老いたれど佛の御名を唱へつつ日

々に新たによみがへらなん

大阪 吉廣夏生

をりをりに梢を鳴し吹く風や秋く

るらしと目を閉ぢてきく

名古屋市 長谷川藤子

高垣にはひまつる蔦色づきて今年

の秋もやや老いんとす

大阪市 吉廣夏生

義光の花と散りにしあところろ夕

日のさして蜩のなく

清水部隊 福永一木

待ちわべば今日ぞ來りて嬉しけれ

戦場に見る故郷の文

東京市 三浦順子

守り袋自らぬひて入院の母のみむ

ねにかけまゐらすも

福岡縣 佐藤伸光

秋立ちて風の音さへ寂しきに背戸

の梢にふくろふの啼く

東京市 三野輪江雪

愛でて讀む歌集をとればフリヂヤ

の花黄ばみはてはさまれてあり

北海道 寺田順山

亡き親のうつし繪見れば見る度

愚かの我れを叱るが如し

郡司島讀典

曉々と響くラツパの音悲し忠魂と

なりし兵ら歸りく

大阪市 水谷良子

戦ひに笑みつつ逝きますすらをの

みたまを迎ふらばん會かな

樹木市 松本結子

白たへの衣に包まれますすらをの杖

にたよれる姿尊し

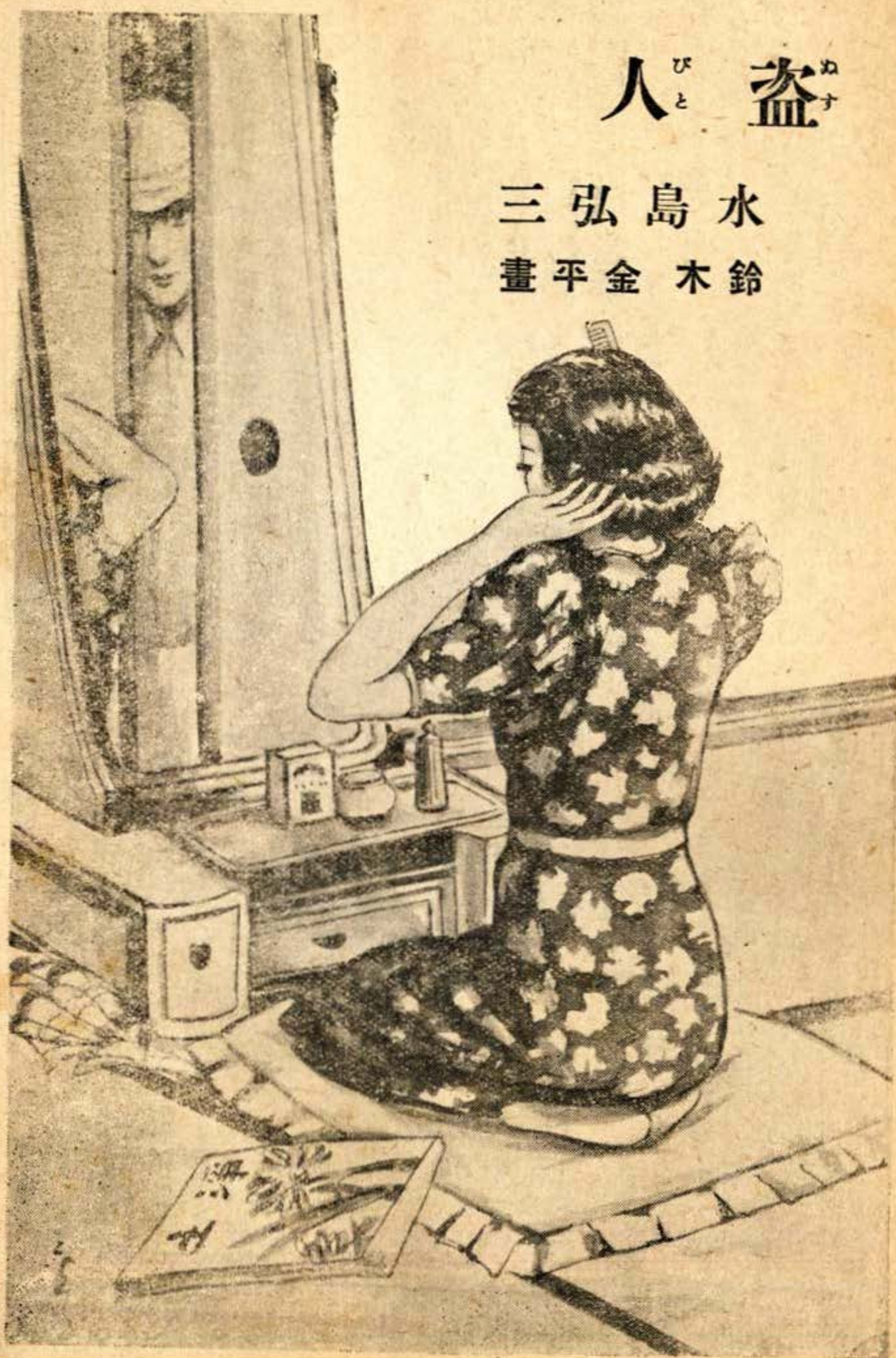
投稿定規

官製はがきに一回二首以内とし、二詩土に編輯部歌壇係あて送ること。

人^{ひと} 盜^{ぬす}

三 弘 島 水

畫 平 金 木 鈴



その電話の聲の主は父親ではなかつた。

それは父親の協同者の原田氏の息子の友太郎だつた。

「貴女のお父さんから、僕の父宛に電報が来て、明日銀行で貴女に逢つて、驛まで送つてやつて呉れと云ふのです。が、合僧と親爺が留守なのでよろしかつたら僕が貴女を送ることにします。」

友太郎は親切にかう云つて呉れるのだつた。

若し彼女がもう小切手を現金に換へて仕舞つて一萬圓と云ふ大金を抱え込んで居るのだと解つたら、友太郎は馬鹿なことをしたものだと思ふに違ひない。そこで彼女はさり氣ない風で、

「えゝ、さうして頂ければ結構ですわ」

と嘘を云つてしまつた。「明日驛から電話で、お金はもう引出して仕舞つたと云つてやればいゝわ」と、彼女は獨りで合點づいた。友太郎はなほ、

「秀子は、どうして貴女が家へ来て呉れなかつたのだらうつて、云つてゐますよ。寄つて下さればよかつたのに」

「でもお邪魔しては悪いと思つたの、それに持つて行き度い着物もあつたものですから。今日こゝへ来るのがおそくなつてしまつて、中へ入るのに随分苦勞しちまつたの。喉が乾を持つて出掛けてしまつてゐたものですから。」

「じゃ、貴女獨りなんですか。——」

「いゝえ、今、正木さんがゐらつしやるの。」

今二人で御飯を食べゐるところなの。」

「正木さん？」

「えゝ、正木辨吉さん、正木さんの息子さんの。」

「辨吉が？」

友太郎の聲が少し鋭い響を持つたやうな氣がした。

「奈美江さん！ 本當に辨吉がそこにゐるんですか？」

奈美江にはその問ひ方が少しづつつけの様に聞へたので、

「えゝ、さうよ。」と出来るだけ、すまして答へた。

一寸沈黙が続いた。と

「僕これから直ぐ、そちらへお伺ひしても良いですか、一寸お逢ひしたいから。」

と友太郎が云ふのだつた。

「えゝ、どうぞ、お待ちしますわ」

辨吉の名前を聞いてからの原田のこの訪問の申出は一寸意に解せないやうに思はれたが、彼女はさう云つて電話を切つた。

そして彼女は辨吉の方を向いて云ふのだつた。

「原田友太郎さんが今此處へ御出になるんですつて、」

辨吉は何も云はなかつたが、急に不氣嫌な顔付きになつた。奈美江

はこの友人の弟、辨吉に段々に好意が持て出して來たところなので、

友太郎の來訪は自分にもあまり好ましくないのだと云ふ氣持を、辨吉に通じ度いと思つた。

前號の梗概

一家打揃つて避暑に行つてゐた三谷奈美江は父親に依頼されて壹萬圓の小切手を持つて街へ歸つて来る。一端我が家へ歸つてから、翌日銀行で小切手を現金に換へるやうにとの、父の注意を無視して、街へ着くとその足で銀行へ行つて、勝手に小切手を現金に換へてしまつて、それを持つて我が家へ歸つて来て見ると、留守居の下女は家を閉めて、鍵を持つたなり、遊びに出かけて、今晚は歸らぬらしい。途方に暮れてゐる處へ、友人の正木まり江の弟辨吉に出逢つて、彼の手を借りて窓を打壊してやつと我が家に入る。そして奈美江は自分一人此處へ泊るつもりで、辨吉と夕食を共にしながら、四方山の話にふけつてゐる。段々この青年に好意を持つて来る。そこへ、電話がかゝつて来る。始めは父親かと思つたが父親の聲でもない。

夜とばりは次第に濃くなつて来る。

『セ、ビヤン、ドンマージュ』と彼女はフランス語でさう云つて、顔をしかめて見せた。ところが、辨吉は一層不氣嫌な顔付きで

『僕、フランス語は解りませんよ』とふくれ面をするのだつた。彼女、が自分を弄つてゐると思つたのだらう。

奈美江は笑ひながら、

『うむ、困つたわね、つて云つただけなのよ、友太郎さん、どうして、わざ／＼此處まで来るんでせう。大丈夫だつて云つてゐるのに。私こそ／＼した人大嫌ひさ。』

『きつと、お金のことが心配なんでせう。』

さう云ひ乍ら彼は立上つた。

『だつて、あの人まだ私がお金を持つてゐることなんぞ知らないわよ。またそんなこと云ふつもりないわ。私の家に私が泊るんだから、誰も干渉する權利はないでしょ。』

『若し何んかの事があつたら、僕の處へ電話をくれれば、すぐ飛んで來ますよ。』

と辨吉は肩を張つて云ふのだつた。

『さうね。でも、私一人で大丈夫よ。』

彼女は強がつて見せた。

十五六分すると、友太郎が、タクシーで乗り付けて來た。

彼は三十二三の背の高い頭丈な男だ。奈美江は彼の妹の秀子とは仲良だつたが、この友太郎は昔時から何故か蟲が好かなかつた。彼は彼女の父の三谷氏が出資してゐる原田商會の支配人をやつてゐる。彼女にはすつかり商人風のしみ込んだ男の様に思はれて、どうしても好意がもてなかつた。

『秀子がどうしても貴女を家に連れて來て呉れと云ふのですよ。』と彼は自動車を外に待たせて入つて來るなり、奈美江に云つた。

『やあ、正木さん久し振りですな。』

男同子が互に義務的な挨拶を交した。

『秀子さんの御親切は有難いわ。でも私今日は此處へ泊まることにしますわ。手紙も書き度し、色々することがあるの、わざ／＼御出にな

ることは無かつたわ。丁度私達今ご飯をすまして……」

奈美江は言葉尻をにごしたが、辨吉がすぐ其のあとを續けて、

「すつかり落付いた處なんですよ。」

と云つてのけた。

「ね、友太郎さん。私自分の家にゐた方が安全だと思ふわ、これから

貴男のお家に行くのもおつくりよ。」

友太郎はいやな顔をした。

「悪いんですけれども、——今度の時はきつとお宅にうかがひます

わ。」

『でも貴女のお父さんが……』

『お父さんはなんともお仰る筈がないわ。』

『秀子がかつかりしますよ。』

『あら雷だわ』

奈美江は言葉をそらした。さつきから遠くの方で鳴つてゐた雷は、

急にこの家の眞上で鳴ひついた。すつかり薄暗が蔽ひ盡した空を、稲

妻が眞二つに引きさいて行つた。すると續いて雨を含んだ一陣の風が

家の窓々をたゞきつけて、雨も風も次第に強まりそらな氣配を示して

來た。

三人の話はそれで急に腰を折られた。沈黙の數分が流れた。二人の

男の間には何か冷いものが交互に流れ合つてゐるやうだつた。

奈美江には自分が少し友太郎にぶしつけ過ぎた様にも思はれたし、

霧圍氣が堪へられなくなつて來たので、話題を轉換しやうと、

『こんな風に急に天氣が變る日には、私どう云ふ譯か、きまつて戦地

にゐる兵隊さん達の姿が眼の前にはつきり見えて來るの。随分ひどい

苦勞をなさつてゐるのだらうと思ふのよ。』

と、とり持つ様な調子で云ふのだつた。

『さうですよ。我々はこんな日にも家根の下にゐられる。然し、兵隊

さん達はもつとひどい風雨の下に、死闘してゐるのですからなあ、——

なんですよ、銃後の吾々は、もつと眞面目にならなくちゃいけません

ね。殊に若い者は』と友太郎は辨吉の方をじろりと見た。

其の眼には明らかに冷いものが光つてゐた。それはとつてつけたや

うにぎこちな言葉ではあつたが、それだけに何か底意を持つてゐる

やうに響いた。と辨吉は急に立つて、もう遅くなるから失禮すると、

不禮を露骨に顔に表して歸つて行つてしまつた。

二人きりになると、奈美江は友太郎に少く食つてかゝるやうに云ふ

のだつた。

『ひとのお客様に當てこするやうなことを云ふのは失禮ですわ。』

『辨吉は貴女がお交際するやうな人間じゃありませんよ。——貴女に

限らず凡ての娘さんが』

『そうかしら。——それは貴方があの人をお嫌ひだから、あんな當こ

すりを云つておいて、それで御自分を辯護するために、さう仰言るの

じやないのかしら。何かそんな理由でもありますの。』

と彼女の隣には一層とげが立つて来た。

『まあ、無いことも有りませんがね。』

友太郎は奈美江の興奮を一向氣にも止めない風だった。

『でも、そんなお話、聞いても仕方ありませんわ。貴方つてとても邪氣なところがおありになるのね。』

彼は別に云ひ譯をしやうとしなかつた。

『それはそれとして、貴女は今日それじゃ僕の家へお出になりませんか。……じゃ、明朝九時半に此處へ向へに來ますから、御一緒に銀行へまゐりませう。』

友太郎も流石に澁い顔をして挨拶もそこ／＼に雨の中を待たせておいた自動車で立去つてしまつた。

彼女の身邊には一時に沈黙が押しよせて來た。だゞつ廣い屋敷中に生きてゐるものは彼女一人、天井も壁も諸道具も凡て彼女の背後でおしだまつてゐる。たゞ、雨と風が、その屋敷のおもてを撫で廻してゐるだけである。

『男つてあんなものなのかしら』

彼女は例のハンドバックをまた小脇にしつかり抱へ込むと、窓をつかり締切つて、壊した窓の穴には板を押へて、ナイフで支へをしてから、ゆつくりと二階へ上つて行つた。

彼女の部屋は南向きの八疊で、隣が父の部屋、ふすまをへだてた眞下が先きに彼女達が入つた窓のある洋室になつてゐる。今あがつて來

た階段の廊下を眞直ぐ行つて突當つた處に湯殿へ通じる階段が付いてゐる。一間の床の間には「藤娘」を描いた彩色の軸物がかけてあつて、花のない大きな花瓶が、その前に置いてあり、小さい美しい人形をきちんと並べて入れた硝子の小箱が一つあるきり、その外に飾りと云つては、鏡臺と、本箱と、机きりの晝は明るさうな部屋であつた。

彼女は寝る仕度をする前に、あの大金の入つてゐる靴の隠し場所を捜さねばならなかつた。床の間の空の轉饒の花瓶が目についた。そうだ、あの中へ入れて置けば良いかも知れない。然し眞夜中に、若し目が覺めて、盗人が、廊下を歩いて來る忍び足の音が聞えたら。——壁を探る手のこすれる音が耳に入つたら、——枕の下に盗の手がさし込まれてゐたら彼女はこゝまで考へると、一時にぞつと、身のしまる思がした。何時の間にか齒ががた／＼と鳴つてゐた。

そらだ電話を身近かに置かなければならぬ。いざと云ふ時に階下まで行つてゐては間に會はない。この部屋の隣の父親の部屋に卓上電話があるのに氣が付いた。彼女はそれに氣が付くと直ぐにまた階下へ降りて、電話のスキツチを入れかへて來た。そして床の間の花瓶にハンドバックを押込むとはつと吐息をついたなり、鏡臺の前にべたんと座り込んでしまつた。友太郎の前ではあんなに強さうなことを云つたものゝさて、獨りきりになつた今では、この廣い屋敷中に身の置き處が無い様な氣がするのであつた。自分が利口氣にやつたこと、小切手を壹萬圓の札だに代へたことが如何にも子供じみたことのやうに思



へて獨りで腹が立つて來ののだつた。

然し氣をとり直して彼女は鏡臺の前で髪を撫で付け始めた。それは殆んど機械的に櫛を動かしてゐるに過ぎなかつた。だが、そうやつてゐる中に彼女には、段々と、誰かがこの部屋を、廊下の方から覗き込んでゐるやうな氣がして來るのだつた。それは、どう云ふ感覺が教へるのか自分にも解らないのだが、次第に廊下からこの部屋を覗いてゐる者があると云ふ意識が強まつて來た。そして、それを否定しやうとすればする程、その意識は強まつて來るのだつた。一種の動物的な本能とも云へるものなのだらう。

彼女はじつと、鏡をのぞき込んだ。鏡臺には廊下に面した襖が自分の姿の背後にうつゝてゐる。身體を少し後ろに引くと、それが益々はつきりうつゝて來る。——その襖が少しづつ開いて來るのだつた。確かに人がゐる！

彼女の心臓は文字通り早鐘をついて、身體はその場にすくんで仕舞つた。然し手だけは相變らず機械的に髪を撫でつけてゐる。眼は鏡の中で、靜かに開かれて行く襖を見ずゑてゐるのだ。二寸三寸、——そこには、部屋を覗ふ鋭い眼が二つ。——然しその眼だけで、奈美江はそれが誰か直ぐ解つた。友太郎ではない——正木辨吉だ。

櫛を持つた手も何ものかに押、られてしまつたやうに動かなくなつた。咽喉は引ついて呼吸が詰りそうだ。櫛がぱたりと畳に落ちた。

しばらくして、彼女は氣を上げまし乍ら思ひ切つて立上らうとした、

その時に襖は元の通り締められた。

襖の向ふ側にゐる男はあの金が欲しいのだ。そしてその男にとつては、自分の正體を彼女に知られては都合が悪いし、喋られたら尙都合の悪い立場にある。——すると最悪の場合には……?

彼女の頭の中で、色々な思ひが走馬燈の様にかけめぐつた。命はもとより惜しい。父も、母も、兄も、自分を愛してゐて呉れる……

彼女は一心に考へを集中しやうとした。靜かに、落した櫛をまた拾ひ上げて、鏡臺に向つて再び髪をなで付け始めた。彼女は今迄の経過をたぐり返して見た。辨吉はハンドバックを落した時に、あの札束を見た。そして盗みを思ひ付いた。彼が、湯殿に身體を洗ひに行つた時に、湯殿の木戸を開けておいた、そして一度外へ出た彼は彼女が友太郎と口論してゐる隙に、そこから這入り込んだに違ひない!

その時奈美江は、辨吉の姉のまり江が自分の弟のことを悪しざまに云つてゐたことをやつと思ひ出した。何か彼にいまはしい事があつたに違ひない。……なほ、いまし方友太郎も云つた「辨吉は貴女のお交際するやうな人間じゃありません」と。……彼女は再び水を浴せられる思ひをした。

彼女はどうしてこの場を逃れやうかと思つた。勿論電氣をけして、このまゝ隠所に潜り込んで、黙つて金をとらせて行くと云ふ方法もある。だが、それでも、ことに依つたら、咽喉を締められないとも限らない。この場から、廊下へ飛び出しても、きつと彼に後から捕へら

れてしまふだろう。聲を出したところで間に合ひはしない。

だが、その時、天來の啓示のやうに彼女の頭にひらめいたものがあった。彼女はわざとゆつくりと立上つて、出来るだけ落付いた風で父親の部屋との境の襖を開けて、隣の卓上電話の受話器をはずして落付いて

『二七二七番——あら秀子さん、私奈美江』と陽氣な聲で話し出した。

『もう遅くなつたので、おやすみかと思つたわ。私ね、あした朝早くこゝを發たうと思ふの、昨日、海岸で、それは面白い経験を……の。それを是非貴女のお耳に入れ度いと思つてお電話したのよ。』

秀子の聲で、『奈美江さん、どうして今日お出にならなかつたの。とても私がつかりしてしまつたわ。』

『仕方ないのよ。都合があつたんべすものでも私大丈夫よ。この家で墓場のやうに靜かなの。いゝ氣、よ。——昨日海岸であつた面白い経験といふのはね……』

そこで彼女は急にフランス語を喋り出した。學校時代暗記した讀本の標題なのだ。

『Un jour une colombe buvait au bord d'une rivière. Une petite fourmi qui voulait y boire aussi tomba dans leau……』

(或る日一匹の鳩が川のほとりで水を飲んでおりました。すると矢張りそこで水を飲まうとした一匹の蟻が水中に落ちました……)

こんな風に讀本の丸暗記を立續けにしやべりまくつた。秀子はすつ

かり面食つた風だつた。

「何によ、あなた！ 何をしやべつてゐる。フランス語、私フランス語解らないわよ。——どうしたの？ どうかしたのじやないの？」

だが奈美江にはそれにかまはず喋りつゞけてゐる。そしてしまひに大聲で笑ひ出した。

「ね。面白いでしょ。皆んなで大笑ひしてしまつたの。じやお休みなさい。こんなに遅く電話なんぞ掛けて御免なさね、近い中にきつとお訪ねしますわ」

さう云つて電話を切つた。

屋内には又沈黙が支配した。彼女は愈々計畫の第二段に移らなければならぬ。また元の鏡臺の前に今度は例の襖に面して座ると、靜かに眼をとして、心を落付けやうと努力した。

「南無阿彌陀佛々々々々々々」

母が何時もするやうにさう口の中で唱へてゐると、不思議に氣持がすはつて来るのだつた。この間の十分間は然し相當に長い時間であつた。この間中彼女は人の隠れてゐる襖から眼を離さなかつた。そして外路に面した窓を開けると、例の襖に向つて嚴しい聲音で

「さあ、辯吉さん、出ていらつしやい！」

とう／＼襖が開かれて辯吉がのつそりと現はれた。彼は不意打を食つて驚きと恐怖で少し戸まどつてゐるやうだつた。然し、先刻は氣が付かないでゐたが、その異様な眼光、そのつき出した厚い額の邊りに

は、彼が生來の犯罪者だと云ふ刻印がうたれてゐた。

「とう／＼見付かつたか。僕の欲しいものは御存知なんでせうね」彼のその少し震へた聲を聞くと奈美江は却つて次第に平靜になつて来るのだつた。

彼女は今開けた窓を指して云つた。

「さあ此處から出て行つて下さい。」

「だが、僕はあの花瓶の中のものが欲しいんだ——、聲を立てゝも無駄だぞウ」

「それは駄目よッ」

彼女はきつぱりと云つてのけた。

「私はたつた今、此處に盗人がいることを喋つてしまつたのだから、もうすぐ此處へ人が大勢来るわよ。」

「なんだつて？」

「貴方は馬鹿ね。私がフランス語で電話をかけたでしょ。あれは私の部屋に男が一人潜り込んで、金を取らうとしてゐるから直ぐに来て呉れと云つたのよ。あれからも十分たつてゐるわ。さつき友太郎さんが電話をかけて此處まで自動車で来るのに十五分しかかゝらなかつたでしょ。さあ早くお逃げなさい。私がフランス語で電話をかけたの

は、さつき貴女が、御自分でフランス語は解らないと告白したからなのよ。そして故意と馬鹿話をしてゐる様な調子で笑つて見たりしたの。でも御安心なさい。盗人が貴方だつて云ふ事はしやべりはしなか

つたから。貴方は私の友人の弟さんよ、その人を縛らせるやうなことはしないから——さあ、早くお逃げなさい。まご／＼してゐると、友太郎さんと警察の人が来てしまふわよ。」

辨吉の顔には、あり／＼と恐怖の色が濃くなつて來た。荒い息づかひ、目は逃げ道を捜してゐるやうに、落付もなくきよろ／＼邊りを見廻してゐる。

「さあ、早く！、この窓から！」

辨吉は咄嗟に身を翻すと、窓口へ飛び付いたが、振り返りざまに「きつと、僕の名は云わないだらうな……」とかすれた聲で云つた。

「云ひません！」

彼の身體はどさつと云ふ地ひゞきと共に地上に投げ出された。

それと同時に奈美江は、崩れるやうにその場に身體を投げ出したまゝ氣が遠くなつてしまつた。

しばらくして、奈美江は友太郎と秀子が彼女の顔を心配氣に、覗き込んでゐるのに氣が付いた。

『どうしたの奈美江さん。フランス語なぞしやべつて、氣でも狂つたのかと思つて飛んで來たの。私にはさつぱり解らないわ。』

『あいつにも解らなかつたの。』

『あいつつて！』

「忍び込んで來た奴。」

「えッ、盗人？……警察へ知らやませうか？」

「いゝのよ。そこらをごろ／＼してゐるルンペン、きつと。これから貴女のお宅へ厄介になるわ。明日は早く發たなくちや。友太郎さんすみませんでした。あの床の間の花瓶を取つて呉れませんか？」

(終り)

捨つる命

加藤清正が茶會を催した折小姓の一人が過つて名物の茶碗を取落して碎いてしまつた。小姓共も一時は驚いたが、流石に武士の子だけあつて、一人の罪人をも出してはならぬ、お互ひに壊した者の名前は云ふまひと誓ひ合つた。程へて、清正が茶碗の壊れてゐるのを見て、小姓共を儉讓したが、誰れも一言も云はぬ。清正は怒つて、

「臆病者め、命惜しさに自分の過ちを隠し立てしておるな」と白眼み付けた處、加藤平三郎と云ふ小姓が、にじり出て、

「臆病者とは心外です。今我々が此處で名前を申上たら疵つく者が一人出て來ます。我々は戰場に於いては百萬の敵を引受

けて君の御馬前に打死すること何んとも思つてはおりません。たつた一つの茶碗とその者の命と代へことが出來ませうや。それ

故我々は名を申上げぬのです。」

と云つた處、清正も大いに感じて、

「頼もしい者共かな」と賞美されたと云ふ。

俳壇

大田早苗子



蟬に國旗の玉の光りけり

半田市 間瀬 龜 館
 評——この句、一見極めて平凡のやうであるが、意味津々として盡きざるものがある。

一氣に力強く読み下してあるところがよいのか、なまじ小細工を弄してゐないのがよいのか、そのいづれでもあらうか。假にこのやうな言葉が敬されるならば、「大平凡の句」……とでも云ふべきであらう。

福島縣 齋藤 華 甫

夕立や煙のものにも有りがたく

評——久しぶりに夕立がやつてきた。なんともしへない涼しさだ。煙のもの——茄子や胡瓜も生き／＼として喜びに

身を揺かしてゐるかのやうだ。作者の感謝の心、敬虔な心は「ありがたく」といふ表現となつたものである。表現法も變つてゐる。面白い。

下關市 中 尾 頑 道

蟬の草にとまれるおぼつかた

評——蟬の體勢は前に強く横にもろい。貧乏ゆすりをする蟬がある。と、こんなことを念頭にいだきながらこの句を眺めた。草の上にとまつてゐる蟬は、少しの風にもぶら／＼して、い

まにも横にたふれさうになり、前にのめりさうになる。作者は、この様子に「おぼつかない」と表現したのであらう。

前の句同様、表現の變つてゐるところが面白い。

石川縣 西村 けん治郎

王子區 三野 輪江雪

巢燕に雷燈の笠土まびれ

蠅の土間くらくして火屋みかく
 上京に際して
 遷京區 鈴木 白舟

分れねばならぬ青草露しとど

廣島市 小 瀬 邦 香

桔梗の嵐に耐ゆるまのあたり

下關市 關 野 公 孫

くらがりの舟と舟との聲涼し

大阪府 辻 た き

龍の音蟬なく森へきこえくる

大阪市 橋 本 花 汀

土の香もたえて久しき展墓かな

青森市 高 松 昭 瑞

海原の宏く涼しく魂祭

名古屋市 長谷川 藤子

秋の蟬にぼく／＼鳴るは木魚かな

王子區 大 堀 井 蛙

蟬時雨ふりかぶりめて寺ちさし

奈良縣 中村 たき乃

散髪をのこしたる子も水あそび

岡山縣 山 岡 虎

かな／＼に入日の迅き寺にして

福岡縣 佐 藤 環 石

秋もはや百舌鳥高らかに鳴きいつ

愛媛縣 千 葉 長 行

すゐつちよの涼しく鳴くや蚊帳に

愛媛縣 大 館 銀 月

きて

奈良縣 森 通 昌 坊

桔梗摘まん濃き山雲の影踏みて

奈良縣 森 通 昌 坊

たなばたやしとどにぬれて椰子の

米子市 宮 本 倩 子

道

奈良縣 久 野 佐 太 郎

蟬突の煙そゞろや天の川

奈良縣 久 野 佐 太 郎

献燈の一人古き青葉かな

在 支 福 永 一 木

あかしやにひぐらしの鳴く支那に

青 森 鈴 木 白 舟

雲の峰に電信柱走りある

大分縣 石 堂 耕 山

草刈れば蟬の子跳ねて秋近し

山口縣 長 岡 見 智

西瓜しろし種のはとりの色づきて

茨城縣 服 部 友 吉

新穀のたゞ忙しき父母憶ふ

大阪府 木 下 恒 次 郎

吾去りて月の八ツ手の縁澄む

横濱市 塚 本 清 蔵

迴廊にたつ静けさや蓮の花

富山縣 藤 田 四 三 九

蓮の時平らかに草を刈りにけり

大阪府 清 水 明 定

夏座敷古いつるるべに蓮いけて

佐賀市 古 賀 澄 善

念佛をととなへて麥を踏みみたり

群馬縣 佐 保 太 郎

無花果の葉の涼しけれ野天風呂

朝鮮 羅 江 八 年 坊

路の邊の萩となりけり月の秋

和歌山縣 奥 村 映 水

各月のいよ／＼更けし那智の宿

北海道 長 尾 了 嗣

干昆布の乾く匂ひや雲の峰

大阪市 吉 廣 夏 生

妻と子の寝息のうちに蟬鳴きぬ

投稿規定

官製はがきに一回二句以内
 とし「浄土」編輯部併増係
 あて送ること



本のない書齋

佐 藤 賢 順

書齋といへば、誰しも、ギツシリ本の詰つてゐる書棚が置かれてゐて、一方の明るい窓に面して机なりテーブルなりが設けられてゐる状況を想像するであらう。そしてそこで机に向ふ人の、熱心に本に読み入る姿や、時としてはまた、あちらの書棚から一冊、こちらの書棚から一冊といふやうに、やたらに本を引き抜いては、本から本へと涉獵した果に何事かを纏め上げてゆく姿を想像するであらう。

然し書齋は必ずしも本を読む所とばかりに限られない。澤山の本を涉獵して、そこから一つの結果を纏め上げることばかりが讀書人の態度とは限らない。昨年物故せられた金子筑水博士は「歩く書齋」が欲しいと言つておられた。つまり散歩の出来る書齋である。書齋の中を散歩するといふのは、一寸妙に聞えるが、歩きつゝ思索しつゝ、ひとは自らの思想を創造してゆ

く。「歩く書齋」とは眞に哲學者らしい言葉である。

私は「本のない書齋」といふものを假想してみたい。「本のない書齋」などと言へば、懸矛盾した言葉で「品物を賣つてゐない商店」と同じであらうし、極端に言へば「丸い三角」といふのと同じで、甚だしい逆説と響くかもしれない。勿論書齋には本が澤山あるに越した事はないし、私自身も出来るだけ澤山の本を集めたいと思つてゐるし、出来るなら其の本の一つ一つを片端から讀破したいと願つてゐる。

けれども本が有り過ぎる爲に、却つてそれらの中に巻き込まれて、あつちからこつちへと引き摺られ通して、苛立しさを感ぜ乍らも自分自らを見失つてゆく、といふことがありはしないだらうか。自らの姿をいつの間にか見失ふといふこと程恐しい

ことはない。さういふ場合の焦燥は、経験したことがある人なら、「あゝあの氣持か」と大抵は思ひ當るところがあるであらう。そんな時には日暮れて道遠しといふ感じを切々と味はされるのである。萬卷の書を焼き紙墨を抛ち筆硯を捨て、晝寢でもしよるといふ氣持にもなる。本くらゐ邪魔なものはない。

書は萬卷を積んでも、結局は、本に過ぎない。如何に高遠な思想が語られ、如何に精緻な學說が述べられてゐても、それが他人のものであつて自己のものでないならば、何の値打ちもないであらう。まして外國の本であつたら、自然科学の領野に於いての如く協同研究を必須とする種類のものは暫く措くとして文化方面のものには、遽に追隨するを許されないものが多いであらう。

「智慧第一の法然房」が「一文不知の愚鈍の身」であるといふ自らの眞實の姿に目醒めて、「愚癡の法然房」と仰せられたといふことに就いては色々の解釋が爲されるであらう。私も曾て若干それに就いて戲論を試みた。知識と信仰、知性の限界、學問と宗教など種々の視角から、それぞれ適切な解釋がなされ得る。然し要するにこの「偉大なる轉換」——智慧第一から愚癡への轉換の最も貴い所は、自らの生々しく赤裸々の姿を見つめ

て、これを如實に擲んだことでなければならぬ。そこに初めて道が開かれる。

「本のない書齋」を必要としてゐるのは、現在では、一人一人の個人ではなく、寧ろ民族全體である。私どもの眼前に大きくはつきりした姿で浮び上つてゐる像は、氣隨氣儘なポーズを取つた個人像ではなくて、しつかりとスクラムを組んだ群像である。自由に振舞ふ個人といふ考へ方は、もうその歴史的な役割を果して、薄暗に姿を消しかけてゐる。

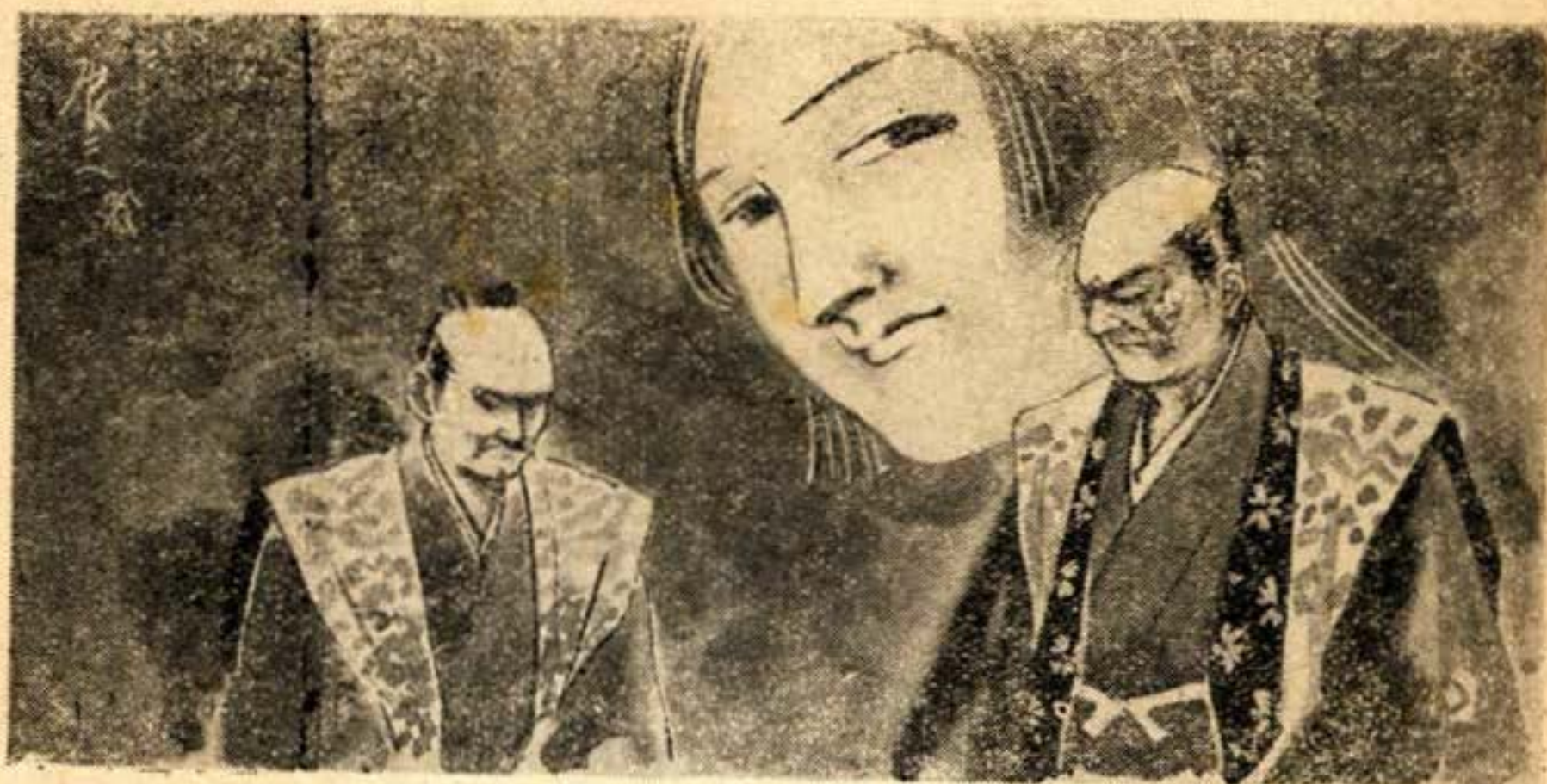
恰も讀書人が本から本へ引き摺られてゐたやうに、我が民族も知識を何よりも貴い寶であるかのやうに考へる明治以來の知性主義の大濤に捲き込かれて、思想から思想へ、知識から知識へと、限りなき遍歴の旅を續けてゐる間に、民族自らの眞の姿を忘れかけさうになつた。民族は自分のものをしつかりと握まなければならぬ。民族的な傳統の中にどんなに貴い思想や信仰があつたか、これからほんとうに反省されて、生かされてゆくのである。

*

*

*

*



説 小

千姫と出羽守

今 野 賢 三
田 村 辰 三 畫

(四)

「さア皆のもの、無禮講ぢや。飲め、飲めといつたらなぜ飲まぬかッ」

大廣間に居ながれ、臆部を前に、盃を手にした家臣たちは、どうしても、酒を口にする氣にはなれなかつた。急に無禮講の觸れ出しでみんなをあつめたものゝ、はじめ、孝親がまづ不機嫌に眉を釣り上げて口をきかなかつた。家臣たちは白けわたつて悲しげに首を垂れてゐた。

「飲め！ 飲んで唄ひ、踊れッ」
孝親は呶號するやうに叫んだ。

みんなだまつて眼を見合せ、恐ろしく主君の顔色をうかがつた。

「誰か士民どもの、唄と踊をおぼえてゐるであらう。踊つて見せいッ」

「左様ないやしい唄や踊、わが君の前では、どうかと思はれますが……」

坂崎勘兵衛がいさめるやうに首をのべた。

「なに、いやしい唄や踊！ ふむ、異なことをいふ。余と士民と、どちらがふか？ 約束を反かれ、女に捨てられて腹を立てゝ悲しむ氣持は、士民も余もおなじではないか。そちなどの年寄の知つたことではない。だまつて居れ」

『ぢやと申しまして』

『かまはぬ、さア踊れッ。唄へッ』

主人の命令であつて見れば詮方がなかつた。小祿の家來が二人、恐る／＼孝親の前へにじり出てかしこまつた。

『うむ。おまへらができるのか。まづ酒をとらせる。飲め』

二人は、大盃を腰元からわたされた。

『ちつとばかりではいかぬ。もつと飲むのだぞ』

主命であるから、二人は眞赤になるまで飲んでしまつた。一人の顔は猿のやうに、一人の顔は狐のやうに變つた。そして、尻を端折り、トン／＼と床を踏んで、珍妙な格向で踊り出した。

しばらくたつて、孝親は吐き出すやうに言つた。

『踊や唄もつまらぬ。もうよせ！』

二人は叱られたやうに首をちぎめてコソコソとひつ込んだ。

またも、大廳間のなかで、おもくるしい、

沈黙におちいつた。

『みな聴け。余は、今日まで、徳川家へ忠義を誓つて來たものだ。今となつては、忠義どころではない。と言つても、余には、將軍家へ双向ふ、兵力は持たぬ。どうしたらよいか？』

孝親の兩眼から涙があふれた。

『此の孝親が、將軍家の掣となる、器量がないからと世のもの笑ひとなるは必定！男の恥ではないか。ひとつには、大御所が、約束を違へたとどこへも訴へようのない腹立しさ！小身もの、無力なものとして、將軍家の權力でふみつけられ、男として、人として、これではすまぬことだ。あの、老狸の狸の家康に！誠の心をもつた人間は、どんなことをするかを見せつけてやらねばならぬ。余の一命にかへても！』

『それは如何やうな意味でござりませうか？無益なことは、お家を亡ぼすもの』

坂崎勘兵衛は眉を曇らせて孝親の語を仰いだ。

『皆にはすまぬと思ふが、坂崎一家の亡ぶことは是非もない』

『と、仰有るのは、如何やうな？』

『本多家へ嫁入るとなれば、通る道は勢州桑名！そこで待ちうけて姫をうばひ、家康の身代りに斬つて捨て、余はその場で腹を切る覚悟！』

『それは、もつてのほかの思召……』

『いふな。勘兵衛！家來どものうち、異存のあるものは、余を捨てどこなりと行くがよい。余は一人になつても、きつと姫をうばつて見せるぞ』

『左様なお考へは、たつて、おとゞめ申さねばなりませぬ』

『だまれッ』

孝親はするどく叫んだ。

(五)

『そちは、本多忠刻のところへ、くれてやることにきめたぞよ』

家康が、にこ／＼しながらかう言つたとき

千姫はどう言つていいかわからなくなつて、たゞちつと、家康の顔を見まもつた。大阪城へ送られたときは、たゞもう寂しかったけれども、子供であつたから、政略結婚の犠牲になつたのだとは氣がつかなかつた。しかし、成長とともに青春の意識が、目をひらいてくるにしたがつて、或るうたがひを持たずにはゐられなくなつた。

(秀頼は、自分にとつてなんであうか?)

露骨に敵として、あけくれ睨みつけられ、のけものにされ、苦痛をこらへながら、うはべは、秀頼に愛される『北の方』でなければならなかつた。それでは秀頼は妻として愛したか? いや、決してさうではなかつた。大切なかざりものにほかならなかつた。また、千姫の意志など、さらにかへりみられぬおもちゃでもあつた。それはほかの美しい女をおもちやにするのとれほどのちがひもなかつた。たゞ千姫にすれば、こはれやすい瀬戸物に觸れるやうにいていねにとりあつかはれてゐたにすぎなかつた。もちろん、夫婦として、心

と心溶け合つたもののでもなければ、眞に愛されるものゝ、よろこびを感じ得るものでもなかつた。いつもみたまされず、寂しく、ひとしれず涙にくれる苦痛のあけくれがつゞいただけであつた。

(將軍家の姫とはこんな不幸なものか?)

この言葉を、いくどか心の奥に向けてみた。けれども、答へは得られなかつた。そして、祖父の家康も、父の秀忠も、なつかしいといふよりはむしろ恨めしかつた。將軍家の姫と生れるよりは、士民の娘でも、もつと、人間らしい、幸福がほしかつた。とにかく、漠然とさう思はれてならないのであつた。

そして、大阪冬の陣、夏の陣で、父と明瞭に敵味方となつてしまつた。心の苦痛と寂しさがさらに加はつた。大阪方が勝つたと言つては、よろこぶ將軍の顔を見るのが苦しかつた。また、徳川方に敗けて無念の涙を吞んでゐるひとくくを見るとこれまた悲しかつた。さらに、淀君からとげ／＼した眼を向けられ、皮肉な言葉をあびせられ、するどくいぢめら

れるのがたまらなかつた。

さうして最後に、淀君に刺されようとしたのだが、その危い瞬間、乳母が淀君の手を拂ひのけ、突嗟に千姫を背負ふて櫓子を駆け降り、はからずも、坂崎出羽守に助けられることゝなつたのであつた。

その日の記憶は、千姫のあたまから、永久に消えることではなかつた。孝親に背負はれて、櫓の下の方から出たときには、失神したやうに、なにもかもわからなくなつてゐたが、五六町はなれた、とある丘の下、樹木のかげにその背から下ろされ、

『もう大丈夫! 御安堵なされよ』

と、耳もとで囁かれたとき、ハツと氣がついて眼をみひらいた。

『あやしいものではござりませぬ。あなたのお願いさまの御言葉で、城内からこれまでお救ひ申した、坂崎出羽と申すもの。もはや、御心配はいらぬこと……』

さう言はれて、相手の顔を見ると、これはまた、痛ましい火傷のたゞれの苦痛をこらへ

ながらにつこり笑ふのであつた。千姫は、感謝か？ よろこびか？ 自分でもわからないう！ あつい涙があふれてくるのを感じた。

そのとき、千姫は孝親の膝に、子供のやうに抱かれてゐたのであつた。だから、思はずその胸へ身も心もなげかけて、思ひきりむせび泣いてしまつた。このときはじめて、ひとの心のあたゝかさを知つた。一命を捨て、救ふてくれた、異性のまことのやさしみを知つた。

『おちいさま！ 出羽どのとの御約束を反古になされてまで妾を本多へゆけとの？』
『あれは約束ではない。下のものに命じたまでのことだ。心配はいらぬ』

家康は眼をほそくして大きな聲で笑つた。
『妾はお約束を守りたいと思ひます。あんなに、お怪我をなされたものを……』

『馬鹿な。小身ものゝ、あんなばけものにそちをやれるか』

『ばけものではござりませぬ……』

千姫は、あまりのことにワツと泣き伏し



てしまつた。

(六)

『わが君さま！ この御奉書を……』

『なんぢや、それは？』

頼府から、重臣に宛てられた内密の奉書を、孝親の膝元へさし出す、勘兵衛の手はふるえてゐた。

孝親は酒にごりの眼で不審さうにその奉書と、勘兵衛の顔を見くらべた。勘兵衛はあきらかに泣いてゐた。

『いまゝで、幾度か、ごらんに入れるか、ごらんに入れまいかと、重職一同で相談いたしました。このまゝでは、兵を向けてお家をつぶされるは必定！ 將軍家、おなさけのこのとりはからひを……』

『馬鹿なッ。なさけのとりはからひなどあつてよいものか』

『御家の安泰の爲と書いてござりまする』

『どれ、しからば見てつかはさう』

孝親はその奉書を取りあげて黙讀をはじめたが、みる／＼うちに、顔は蒼白になり、

唇が憤怒のために震え出した。

「余を自殺させて、家の安泰をはかれとは、卑怯なはからひッ」

奉書は両手でひきちぎられ、力をこめてたゞきつけられた。

「勘兵衛ッ。余に腹を切れといふのだな。そちまでが！」

「いゝえ、いゝえ、家來が主君に、お腹を召されよと、どうして左様な不忠」

「だまれッ。不忠を知るなら、なぜこの奉書を幕府に突きかへさぬ」

「御心中をうかゞつたうへにと存じて」

「余が心を知らぬといふのか。親とも子とも信じてゐた家來から、腹を切るとすゝめられる、余の心中は！」

「では、如何にして、お家の安泰を保ちませうか？ 恐れながら……」

「家の安泰とはなんだ？ それは、たゞ、生きてゆくといひだけのことだ。それよりも大事なこと、正しいことが失はれることだ」

「姫君をうばつて殺し、君も相果てさせられ

ることがどうして正しいこととござりませうか？」

「將軍であらうが、大御所であらうが約束を守らぬのが不正なことではないか！」

「いゝえ、いまは、天下を取りさへすれば偉いのでござりまする。豊太閤でも、家康公でも、正しい手段で天下を取りませぬ。それが戦國のならひかと」

「だまれッ。戦國の世であるから、弱いものを、どんなに苦しめ、欺いてもよいといふこととはないぞー 虫けらのはてまでも尊び、いつはらぬこそ、天下を取つたものゝつとめではないか。人の心をふみにじり、平氣である武將の心は、憎悪んでもあまりある！」

「ぢやと申して、徳川に向ける奴は持ちませぬ」。

「兵がなくとも、復讐の手段はあるぞ。余にとつて千姫はいとしい。いとしい女をうばひ手にかけて殺さうといふのも、家康や秀忠の眼を覺ませたためぢや。これも、敵の胸に奴をあてることではないか」

「おなさけないお心持でござりまする」

「なさけなく思ふのはそちたちの心だ」

「思ひとゞまりなされることは出来ませぬか？」

「思ひとゞまつても取りつゝされる！」

「幕府にお詫び申上げたならば……」

「だまれッ。詫びる悪事はして居らぬ」

「それも方便でござりまする」

「あゝ、そちたちまでそのとほりだ。人の心のまことをかゝげて、世とたゞかふものが一人もないとは、なんとといふ、さびしいことか！ 余は泣いてもたりぬぞ」

「お家を守るためには、勘兵衛とても、泣いてもたりませぬ……」

主従は、たがひに異つた寂しさをいだいて涙にむせんた。

「もし、わが君さま！ わが君さま……」

孝親は睡眠をわづかにみひらいて、あたりを見まはした。元和二年、二月の夜は、寒さ

(七)

が寢所内にみちてゐた。まくらもとの、わづかな灯影に横顔を描いて、しよんぼりとすわつてゐるのは、氣に入りの腰元、早苗であつた。少女の美しい眼は、或る恐怖にふるえてゐた。そして、あたりに警戒のまなざしを向けたが、聲をひくめて、孝親を一生懸命にゆり起したのであつた。孝親は昂奮のあまり、あびるほど酒を飲んで酔ひ倒れ、前後不覺に寝入つたので、いつのまに寢所へはこび込まれたか知らなかつた。

『ほかの女どもは?』

『みな遠ざけられました』

『そちだけを?』

『いゝえ、妾も遠ざけられましたか』

『どうしたのか?』

『おしづかに願ひまする。御家老さまや、ほかの御重職さまのおはからひで……』

『余の知らぬうちに』

『ハイ、いますこしまへ、覆面のおやしいものが、この御寢所で御そばへ駆け寄りました。あやしいものは、抜刀を片手に』

『まだ居るか?』

『妾の足音で、御廊下の暗闇へ、姿をかくしましたか、また来るかも知れませぬ』

『危いことであつたのう』

『左様でござりまする』

起きあがつた孝親は、あたりに注意の眼をくばつてから腕組みをして考へ込んだ。深い溜息を腹の底から吐いて天井を仰いだ。

音もなくすゝんでゆく、時のあゆみだけが感ぜられるやうな、言ひやうのないしづけさがあたりをとりまいた。

『よいか、早苗! そちだけは覚えておけよ。孝親は、家來の手にかゝつて死ぬよりも、徳川へ復讐の双を、わが腹へ突きたてるのが増だと考へたとな! 千姫の名を呼びつゞけて、悲しい最期をとげたといふこともまた、きつと忘れまいぞ。よいか?』

『ハッ、ハイ……』

『泣いてくれるのはそちだけだ……』

そして、孝親は、白山の本陣における家康の顔を描き出し、悲憤の眼で睨みつ

け、自害してはたが、幕府では自害と認めず、家來たちが協議のうへで酒を飲ませ、寝首を刎ねたといふ噂を理由に、家臣として主君を殺すのはけしからぬと、所領の地を沒收、家來たちを追放處分におこなつてしまつた。(終り)

無

私は

河馬が好きです。

河馬は如何にも馬鹿面を丸出しにしてゐて、

一向に惻巧振つて居らぬ。

馬鹿が「馬鹿面」をせずに、惻巧振ると

一鞍馬鹿に見える

その點

河馬は惻巧振らぬだけ惻巧です。

中野 尅子

國際事情解説

★漢口攻略と國際關係

三 浦 孝 ★

淨吉「待望の漢口攻略戦も愈々白熱化してきたやうだね。」

土夫「黄河や長江の堤防を壊はして我軍の行動を邪魔しようとしたが、皇軍の追撃振りはどうだ。」

長江の南北に亘つてひた押しに突進してるじやないか。目覺ましいもんだ。」

淨「漢口が陥落すると事變の様子も大分變るだらうか？」

土「勿論だ。漢口の陥落は南京や徐州の陥落よりずっと大きい打

撃を蔣政権に與へるからだ。尤もさう言つたからといつて、蔣介石

はおいそれとは謝つては來まい。否、恐らく廣東とか雲南とかいふ奥地に逃込んで相變らず長期抗

戦だなどと嘯くことだらう。しかし列國の態度には相當變化が起ると考へられる。英、佛、ソ聯米

等の態度は可成り變りはいないかな。自國の權益を犠牲にしてまで蔣政権と心中しようなんていふ國

はないからね。」

淨「すると皆んな見放すかな？」

土「いやさうとも限らない。兎に角今迄尻押しして來たんだから急に振り棄ても出來まい。列國は日本が弱るのを今か／＼と待つてゐるんだ。ところが一向弱らない。

唯支那事變に對する認識を漸次改めてゆかさざるを得ないだらう。

つい先達つての張鼓峰事件を見給へ。日本軍の示した斷乎たる武威には、流石ソ聯の赤軍も一寸身に泌みて應たへたらしい。各國はソ聯の弱腰と日本の實力に驚異

して考へ直ほしてるといふ形だね。」

淨「張鼓峰事件が解決して一番ガツカリしたのは國民政府だらう。」

土「さうだ。それに列國としては極東も氣になるが、自分達のお倉

にも火が付きさうだからね。」

淨「へエー、といふと？」

土「歐洲の情勢が險惡なんだよ。正に一觸即發といふ感があるね。」

淨「歐洲の何處だね？」

土「何處と數へれば一、二に止まらぬが、一番大きいのはチェコ問題だ。」

淨「うん。新聞にはチヨイ／＼見受けるね。しかしチェコなんてそんな隅つこの問題がどうして大事件なんだね？」

土「さう。これはチェコ國內のズデーテン地方に居るドイツ人の問題だ。これがチェコだけの事なら取るに足らぬが、仲々尾を引いてゐる。抑々事の起りは今年の三月獨逸合併以來のことだ。新興ドイ

ツのこの成功に刺戟されてこれまでにチェコの國內で壓迫されてゐたドイツ人が蹶起したんだ。そして小數民族として自治、更らには

イツ人の併合の要求をチェコ政府に叩きつけた。これがズデーテン黨の八項目の要求だ。この要求の背後にドイツ政府の在ることは公然たる事實だ。一方チェコにはソ聯やフランスが付いてゐる。特に最近ではイギリス迄が乗出してきて、調停役を買ひながらチェコをかばつてゐる。」

淨「イギリスとは大分離れてゐるのにねえ。」

土「それはチェコ問題が悪化して獨チエコ間に戦争が始るとなる」と、それがフランスに飛火することとは當然だ。さうなると英佛協調の建前から否でも應でもイギリスが戦争に捲込まれるのは必至だ。それでは困るので仲裁に入つた。」

淨「成程。」

土「ランシマン卿といふのを幹旋役に派遣している／＼やつてゐるが簡單には收まらない。かれこれするうちに八月十五日からドイツ國防軍は國境附近で秋季大演習をやり出した。百廿五萬の軍隊を繰出して十二週間も演習するといふのだから英佛は仰天した。さてこそドイツは武力でチェコを壓迫し、ズデーテン問題を解決しようとしてゐると考へて、イギリスは艦隊を北海に出動させるし、フランスはマヂノ要塞を堅めるといふ騒ぎになつた。これでどちらか引金を外せば歐洲は又々大戦だ。」

淨「それで戦争になるだらうか？」

土「さあ、それは解らない。どつちとも斷言致し兼ねるな。各國とも腹の中ではやり度くないが、これ許りは弾みといふものがあるからね。」

淨「何んだか前の歐洲戦争の前と

そつくりみたいだね。」

土「大いに然り。第二次世界大戦の前夜と言へるかも知れない。持たざる國と持てる國の對立ともいひ、防共協定諸國と民主主義諸國の對立とも言へる。中でもフランスは人民戰線内閣が出来てから、フランスは下落し、國勢は衰へるといふので、遂にこれまで一週四十八時間制だつたのを止めて四十八時間制を復活させたね。これで國民所得を増大させようといふんだ。左翼各派では怪しからんと怒り出し、大分ゴタ付いたが獨佛の情勢が切迫して内輪喧嘩はして居られないといふので漸く收まつたなんていふ始末である。」

淨「さてそうしてチェコは一體どうなるだらう？」

土「英佛ソは勿論、ドイツでも平和裡に解決したいのが本心だ。無

暗に戦争は吹っかけはしない。チエコ政府にはなるべくズデーテン黨の要求を入れて譲歩しろと奨めるし、ドイツやズデーテン黨には要求を緩和して穏なしくやれとすかしてゐる譯だ。」

土「そして丁度九月五日からニールンベルグでナチス黨大會が開かれる。そこで恒例の如くヒットラー總統が獅子吼するが、その演説でドイツの態度がはつきりするだらう。列國はそれを堅唾を呑んで聽いてゐるのだ。」

淨「友邦ドイツも偉いもんだな。」

土「チェコの他スペインは片付かぬ、パレスチナ方面は騒擾が起る。ソ聯では再々の肅正工作の血が流される……」

淨「どこも硝煙臭いね。」

土「さうだ。かうした中を日本は一路所信に向つて邁進するんだ。」

婦 人 の 頁

病院慰問など

貞恭婦人會

先日續仰會女子部、貞恭婦人會の方々の例會がありました時に、記者がその席に割込んで、お話をうかがひました。いさゝか参考にもなるかと存じ掲載いたします(記者)

傷病兵慰問

記者 あなた方は陸海軍病院を二三回御訪問になつたさうですが、御感想は?

A 始めはなんと云ひますか、とても複雑な氣持でした。それに

誰れのところへ行くともきまつてゐないので、どうも近附き憎い氣持でした。

B でも「淨土」を持參したので大へん助かりました。「淨土」で話の緒口が始められるので、案外すらく慰問の言葉も言へるのです。

記者 何處の病院へ行きましたか?

C 第一と鴻の臺と立川です。

今度は神奈川縣の田舎の方へ行き度いと思つております。

D 市内の病院ですと御見舞も随分ありますが、田舎の方ですと、土地の人は毎日來て下さるさうですが、東京の方はあまりお見えにならないさうですから。

記者 特に東京の婦人をおよろこびになりますか。

D さあ、兎に角慰問に參ると大變喜んで頂けることは事實です。

B 慰問品には困ります。菓子

など誰にも食べられるものは選定に困りますし、下帶なども緋の統制であまり求められせんし、手頃な良い雑誌として「淨土」なぞ一番いゝのぢやないですか。それに子供さんがとても歡迎されます。子供は無邪氣ですから、直ぐ兵隊さんと仲よくなる。この間の

慰問の時もじさんのお子さんが童謡踊りをなさるので、それをやつてお目に掛けたところが、とても喜ばれました。慰問の時は子供さんがスターです。今度の時も是非Cさんのお嬢さんに御願申します。……でも學校をお休みになるのは……

C でも學校でも慰問ならば特別にして下さいます。學校の先生が「うんと練習しておいて、こんど一緒に行つてやりませうね」と仰しやるさうです。

記者 それは良い。子供さんの踊りはいゝですね。——女と男と何方がよろこばれますか?

S それは女でせう。女の方がどうしても感じが柔かですからね。この間の勸勞奉仕の時、私たちの學校の學生が女學生と一緒に勞働したんですが、兩方とも一所

懸命にやつてゐるんです。驚く程熱心です。男だけだといけませんね。

(哄笑)

A そんなに女がよろこばれ人氣がありますのに、女の子が生れると男の子程よろこばれないのはどうしてでせう？ (笑) 私の所な

ど女二人で全く人氣なしで、母たるものゝ顔が立ちません。女だつてこんなに働いてゐるのに (哄笑)

記者 女の方など病院慰問などして繻帶など巻いて上げたりしたらどんなものでせう？

A 行つて洗濯などするのはいゝ事ですね。

婦人の時局認識

記者 婦人の時局認識などどんなものでせうね。

S 女學生などは相當深いんぢやないですか。自分で進んで仕事

をやつてゐる。強制でなしに。

D 最初に病院を御見舞した時には随分感傷的になりましたが、度重なるに従つて、さう云ふ感傷が少なくなります。慣れて来るんでせうか。

B そうですね。遺骨を迎へる時もそうです。此頃では毎日驛頭で出征を御見送りする時の方が殊に胸が一つばいになります。

A でも、白衣の勇士がスポーツやお仕事をしてゐる寫眞を見るとなんと云へない氣持ちになります。あの方々には、國家としては經濟的には不自由はさせないでせうけれども、家庭的には色々問題も起ることとせうから、これらの婦人の活動と云ふものが一層大切になると思ひます。

B それには信仰を基礎に置いてないと色々色々面倒が起るで

せう。

記者 戦時の婦人と信仰ですか、それは良い問題だ。

C それは貴方等 (記者達) が御意見を伺ひ度いと思ひます。有本職です。

記者 大きな問題ですから、こ

の問題に就いても、此度ゆつくり

御意見を伺ひ度いと思ひます。有

簡易防毒面製作講習會

時局重大の折柄此度當會で防空化學研究所員福島延太郎氏指導のもとに簡易防毒面製作に長日月腐心完成された伊藤成圓氏を講師として簡易防毒面製作講習會を開催いたし度存じます。家庭防護の重責を負ふ主婦自らの手によつて完全なマスクを各家庭に備へ國民防空の一助と致し度く奮つて御參加を御期待致します。

法然上人遺仰會内 貞 恭 婦 人 會

講師 伊藤成圓氏 (防空化學研究所技師福島延太郎氏推薦)
日時 九月廿八、廿九兩日午後一時より
會 場 芝區芝公園十五號地 明照會館

(市電、増上寺前又は芝公園下車、芝公園)

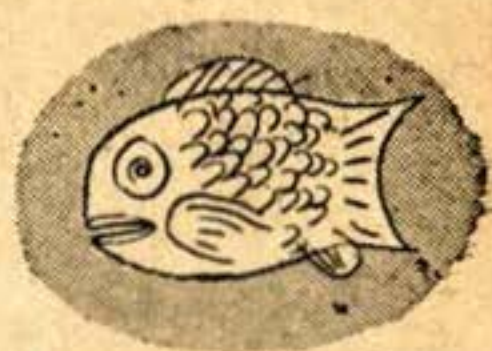
御持參を願ふ材料 エプロン、ハサミ、木綿糸、針、指拔、木綿布一尺、

その他材料費壹圓以内

★どなたでも御參加出来ます！
★完全な防毒面は主婦の手で！

貞恭婦人會例會 十月一日 (土) 午後一時

講師 佐藤賢順



見て来た八丈島

生田 花世

—— 見 ——

村々では、初めて人が知り合ひ
となると、

『御宗旨は何でございますか』

と聞く。

丁度それと同じやうに、私は八

丈島へ行つて、この黒潮の中の島、

かつては、漂流者の島、次には流

人の島、今では移民を出す島、又

牛乳、黄八丈を産出する島に問ひ

たかつた。

『御宗旨は何でございますか。』

と云つたところで、通りがかり

の人に一々きくわけにもゆかず、

お寺に、いきなり入つてゆくのも

變なものだつた。

八丈島から歸つて、八丈支廳か

ら、菊池といふ人にもらつてかへ

つた「最近の八丈島の現況」とい

ふ刷りものを讀んで見たら、そこ

にちやんと、返事がのつかつてゐ

た。

「本島はおほむね浄土宗なりと一

更に詳しく、それを擧げると、

「寺院は大賀郷村に宗福寺、三根

村に善光寺中之郷村に長樂寺あり

て、何れも浄土宗に屬す。本島は

大部分佛教（浄土宗）を信仰し云々」

とあるのであつた。

長樂寺などは、はじめ、唐僧が

やつて来て長崎などと同じやうに

禪寺として開基し、明暦年間三百

人の唐人が、又來てゐる。しかし

これは漂流して來たので、何年間

かのうちに何れも飢餓のために死

じし、たゞ一人生きのこつた宗感

といふのが、僧となつて、この長

樂寺にゐたといふ事である。これ

は「八丈島實記」によつて知られた

のであるが、この禪寺がいつから

浄土宗になつたか知るべくもない

が、とにかく、自力本願から、他

ただ乗り

雨の降つてゐる日だつた。

私の乗つてゐた満員電車が、

ある交叉點で止まつた。運轉手

臺から降りた女の客が、車掌

臺に廻つて、切符を貰つてゐる

らしい。車掌が大きな聲で細か

いのありませんか。十圓札じゃ

困るな……釣銭ありませんよ。

……えッ、小銭がないつて。仕

様がな……」など云つて

ゐる。運轉手はぢり／＼して盛

んにチン／＼やつて催促してゐ

る。



力本願と轉向してゐる。

○

「島も通はぬ八丈が島……」と古くから歌はれて来て、そこはなかく行けないところ、又不仕合せものの住むところ、暗いところとかういふ風におもはれて来た八丈島、行つて見ると、いろいろのことが多様、多角に考へられた。多くの示唆がこの狭小な島に一杯あつた。その中から、宗教に、關係のあることを一つ二つしるして見たいと思ふ。

前にも述べたとほり、漂流唐人船の三百人からが、この島で飢ゑ死んでゐる。いかに慘澹たる事であつたであらう。しかしながら、この島の歴史は、それが、唐人ばかりではない事をしるしてゐる。

神武紀元二二六九、永正二年に大飢饉で、十八軒をのこし、他はみ

んな牛を殺して食べ、草の根、木の根をさがして辛じて生き、降つて、慶長九年には津波十年には、八丈富士の噴火、明和六年には、餓死四百人あまり、天保三年には同じく餓死三百人あまりと記されてゐる。この外に、明治年代までは何回かの痘瘡の流行で、一度に、二百人、三百人と死亡し、颱風とか、船の難破とかで、またそれ／＼死人が出来てゐる。文字どほり饒角の焦土だ。人力でどうすることも出来ず、災禍の中に坐しては、たゞたゞ人間の力の無力を感じ、いきほひ、他力本願とならざるを得ない事、事情として、當然の事に、私にはおもはれた。

○

他力本願とならざるを得ないものに、もう一つ、戦争がある。

今度の支那事變に、空襲の敢行のために、中支の空で散華した海軍飛行隊の一人、佐藤主計少佐の戦死後の遺品が、某所に展覧されてあつたのを見た私は、その遺品中のノートに瞠目した。開かれてゐるその頁のまんなかに、鉛筆にて、

南無阿彌陀佛

と大書し、右に「熱慮斷行」左に「一誠奉公」とならべてあつた。死を覺悟しての寸前に、念佛をした／＼め、心中にもとなへ、颯爽として、飛行機に搭乗したその信仰をおもふと、おもはず肅然として、私は眸がうるんだ——これを私は八丈島の流人のあと、漂流者の跡におもひ合した。

流人、浮田秀家（關ヶ原の戦いに、石田三成にくみし、一敗地にまみれ、とらはれて、死一等を減

「ちや、仕方がない。今度の時一緒に買つて下さいッ！」と車掌は氣前よく、そのお客をただ乗りさせて、電車を出して仕舞つた。

私の傍にゐた男が感に堪へたやうに叫んだ。

「十圓札で片道の釣銭をとらうつて云ふのか。ちエツ、いい手を食はしやがつたな。……俺も今度からあの手をやらうかな」

乗客一同がどつとばかりに笑ひ聲を立てた。と、彼の連らしい男が云つた。

「ほッ！ 君でも十圓札を持つてゐることがあるのかい？」乗客の笑ひがまた爆發した。

奇蹟

自動車で怪我をした人の話。

じこゝに流された人々の墓も、明治
戦代の御赦免に浴するまでは、た
ゞ「南無阿彌陀佛」の唱名のみ
墓であつたさうだ。宗福寺に、歸
依してゐた浮田秀家は、いかばか
り、無念の戦敗、流浪の身を、こ
の念佛をとなへることに慰められ
たか。信仰の結果、死中に生の覺
悟も出来てから、はじめて、八丈
の島の火山土の上にも伸びるみづ
みづしい林や、林に來てなく盡ほ
とゝぎすや、鷺や、底土の濱の
濱木綿などに往生のつばさを感じ
しみぐと素直な情懷を催したら
しい。飢ゑつつも、自らを破らぬ
日々の暮しをつゞけた、この浮田
一族の人々のことが、島にのこる
この人々の和歌にうかがはれる。
難破した人々も念佛によつて死
を迎へたであらう、私の見、かつ
おもひしのんだ事は、この八丈島

の多くの念佛の聲であつた。
流人、漂流人の生活が不幸ばか
りで、暗いものばかり終始したと
考へるのは一知半解の見にすぎな
い。
この島の昔、悟りを開いた流人
漂流人の相當あつたことを私は事
毎に見聞した。でなければ、この
島を、こゝまで建設し得られなか
つたであらう。有名な近藤重藏の
曾子富藏といふ人などこの島に流
されて、心機一轉生あるものは蛋
シラミといへども殺さず、仁者と
して、島の健實な發展に大努力し
ひろく、徳を布き、赦免になつて
からも、淨土八丈島がなつかしく
てたまらず、再び歸つて來て、こ
ゝに骨をうづめてゐるといふ有様
だつた。
八丈島には魅力があつた。
黒潮の中を文鯨魚(トビウオ)

龍蝦(ヘイセエビ)が、回游魚にと
もにたえずめぐる傳統の島、稱名
を往生のつばさとし、九品の蓮臺
にのぼつた人々の永眠してゐるあ
の紫の島へ、私はいつかは、も
う一度ゆかりとおもふ。どんなに
また、御藏島沖の浪が高からう
と。

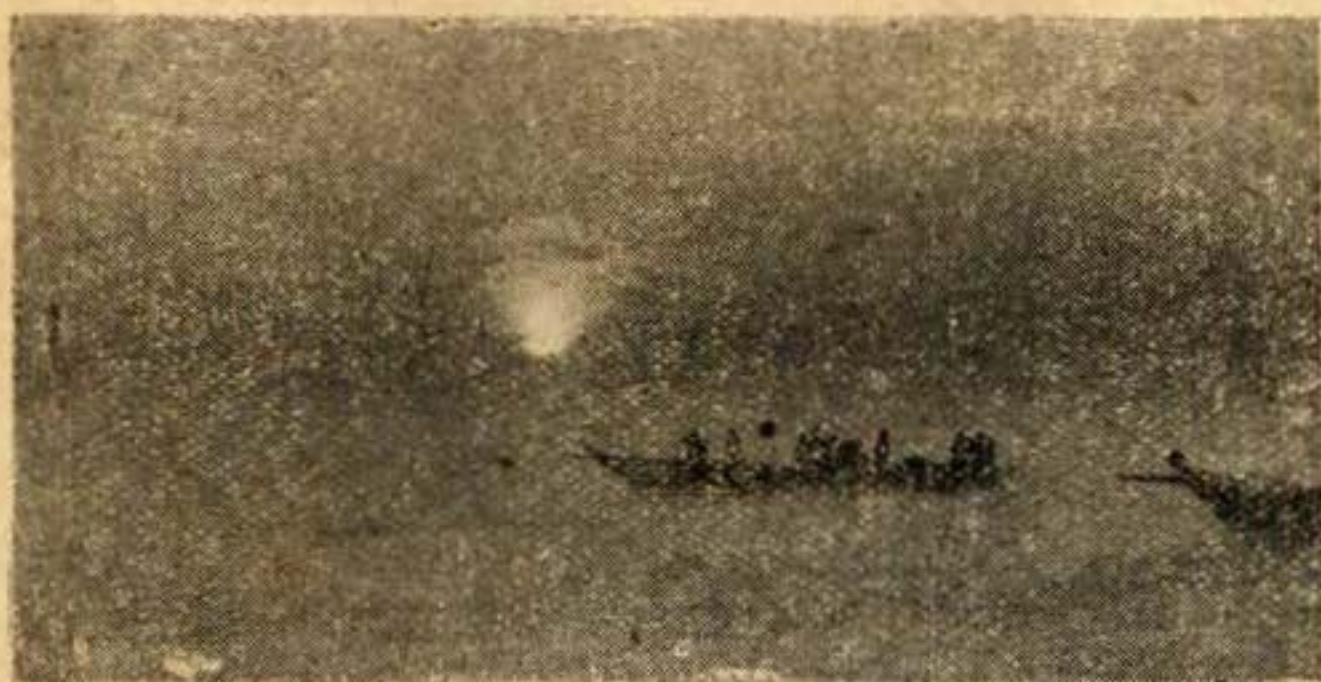
俳壇選外佳作

遊賀縣 重野ふみ子
満月のぼつかりうかび寺の屋根
樹木縣 大輪 清
峯々の碧さやかに鵬のこゑ
京都府 津田 秀月
紅白の蓮も説教聞らしく
神奈川縣 小宮 徹平
秋うらし 鶏 鳴いて午下り
下關市 内海 豊海
立秋やかはりしとみる山のいろ
千葉縣 安田 九郎
夏座敷子は下駄はいて歩きゐる
島根縣 井上 雪枝
瀧に遠き宿の端居や河鹿鳴く

自動車は崖から轉り落ちた。
尤も、崖と云つてもそれ程高く
はない堤のやうになつた處だ
つたさうな。

四五人連れで、斷詰に乗つて
ゐたのだが、その人は始め遠慮
して、前の席、つまり座席を引
き出すやうになつてゐる、あの
席に腰掛けやうとしたのを、無
理に座りこゝちの良いいクツショ
ンの處へ腰掛けさせられた。
ところで前に云つたやうに、
崖ツぶちを自動車を通り抜けや
うとした時に、車輪の下の地面
が崩れてアツと云ふ間に自動車
はころ／＼と崖下に落ちた。
自動車は一回轉すると、うま
く崖下で車輪を下にして、すつ
くと立上つたと云ふ形で、元の
姿勢に返つた。
そのために乗客の怪我は少

十月の行事 秋の十夜法要



昔から傳はる色々な佛事法會があるが、その内でも淨土宗の「お十夜」日蓮宗の「御會式」などは先づその代表的なものである。

此のお十夜法會は、昔は陰曆の十月六日から十五日までの十日間勸められたものであり、今でも地方へ行けばこの陰曆によつて行はれてゐる所もある。十夜會とは十夜會念佛法會の略で、十日十夜の間に、別時念佛を修して阿彌陀如來の大悲弘願を感謝し奉り念佛の淨業を積み重ねるのである。

『近世風俗誌』と云ふ本の中に「十月六日より十六日に至るを十夜と云ひ、白河の女院宮中にて始めて勤行せしめ玉ふ、……又後明應四年武州品川願行寺開山勤譽祐崇

上人勅に應じて京都に入り十夜法會を淨土宗にて執行する事を聽聞に達す。鎌倉光明寺に歸り初めて之を行ふ、淨土宗諸寺にて修する始也」とある今でも淨土宗のお寺では何處でも盛な十夜法要を行つてゐる。古川柳にも

そうばんのひしげた所で御十念
そうばんが鳴りやすと嫁舌を出す
などあるが、そうばんは双盤で大型の、鐘を二つ合せたものである。それをガン／＼鳴らして念佛の唱へるのである。月の明るい夜ふけ双盤の響きは山野に鳴り渡る。やがて明方ともなれば參詣者も疲れた法要も一休みとなるのである。

現今では十日間別時念佛を行ふお寺は少い様だが、善男善女が一堂に會して長夜を念佛に明す。十夜法要とは如何にも秋にふさわしい行事である。

なくてすんだし、前の席に腰掛けてゐた人達は、運轉手との境界目の鐵棒を確りと握つてゐたので、全く怪我をしなかつた。その人は、無理に上等の席に押込められたお蔭で、却つて把り處がなかつたので、胸に打撲傷を負つた。親切が仇になつたと云ふ譯である。

そこで、運轉手だが、彼はハソドルを確り握つてゐたので、宙で身體が一回轉したと云ふだけで何の怪我もしなかつた。運轉手はあとで、いくらか、とりなし顔に云つたさうである。『いや、自働車が落ちた處で逆さになつてゐたら大變でしたが起き直つたんで助かつたんです。……あの時、私が無中でハソドルを廻してゐたもんですかね。』



新作落語

月

月亭

何をやつても人並みはずれると

後世に名を後すことが出来るさう

で、泥棒でも熊坂長範、石川五

右衛門、下つては鼠小僧次郎吉、

ジョマにアルセース、ルパンなど

となると斯界のオーソリチイ、子

供で知つてゐます。が、手前共の

話にはかう云ふ選手諸君は出て

参りません。溝鼠から進化した

やう、なむさくるしいのでないと

お話になりません。

「おや、妙な奴が出て来たな。便

た。これを泥棒の公式主義者と云

ふんだらう。……おやおや、泥ち

やん、椽側に腰を下したよ。何を

してやがるんだらう。あれ、月を

見てゐるのかな。いやにのんびり

した泥棒だね。……なる程雲がす

っかり晴れて良い月になつたな。

……この間にうしろから行つて

おどかしてやらう。……やいッ！

泥棒ッ！

泥棒「やッ！ 驚いたッ。おめえ

は何んだ？」

所から這ひ出して來やがつたぞ、臭え奴

だな。……は、あ、

泥棒だな。だが間拔

けな泥棒だな。縁側

の雨戸がちゃんと開

けてあるのにわざわざ

ざ便所の汲取り口か

ら入つて來やがつ

「なんだとはなんだ。手前こそな

んだ？」

「俺は泥棒だ！」

「泥棒が月を見て感心してゐちや

仕様がねえぢやねえか。さつさと

仕事をしねえか、と云つても此處

は俺の家だ。何にも取られるやう

なものねえが、泥棒なんぞ家に

ゐちや物騒でいけねえ、早くけえ

れ。」

「へえ、どうも相すみません。ど

うかまあ、さう大きな聲を出さね

えで静かにしておくんない。此

處は野中の一軒家ぢやねえんで、

近所隣へ聞へるとうるせえから。」

「何を云つてやがんでえ。まる

で俺が押込みにでも來たやうに云

つてやあがる。……時にお前まだ

泥棒は新米だな。」

「へえ、まだほんの馳出しで。ど

うぞよろしく御引立の程を。」

「泥棒なんぞ引立てゝたまるか、

どうも新米らしいと思つたよ。雨

戸があいてゐるのに、わざわざ臭

え處から入つて來てよ、月を見て

首をひねつてゐるなんぞ、先祖の

鼠小僧に恥しくねえか？」

「さう、云はれると面目ありませ

んが、實はあんまり良い月なんで

ついうつとりと……」

「盗人に遁入つて、うつとりして

ゐりや、せわアねえ。で、一句浮

んだつて云ふ譯か」

「ところが、丁度一句うかびさう

になつた處を、お前さんに、やい

ッ、泥棒！つてやられたんでトタ

ンに引込んじまつた。」

「ほう、然し仲々風流な泥棒だな

俳句なら、俺もやるから、こゝで

二人で運座をやらうぢやねえ。」

「そりや結構ですな、名月や泥棒

とする運座かな」とね」

『雲晴れて月を盗みに來たりけり
——つて云ふのはどうだい、泥棒
ッ』

『さう、泥棒々々つて云はないで
下さいよ。近所隣があるんだか
ら。』

『また始めやがつた。泥棒を泥棒
つて云ふのにさしつかへは無から
う。……だがな、泥棒。考へても
見ろよ。このお月様は今戦地で働
いてゐる兵隊さん達も同じやうに
照してゐるんだぞ、戦地の兵隊さ
んが同じやうにこの月を見て何を
考へてゐることやら、月が鏡に
なつたなら……』

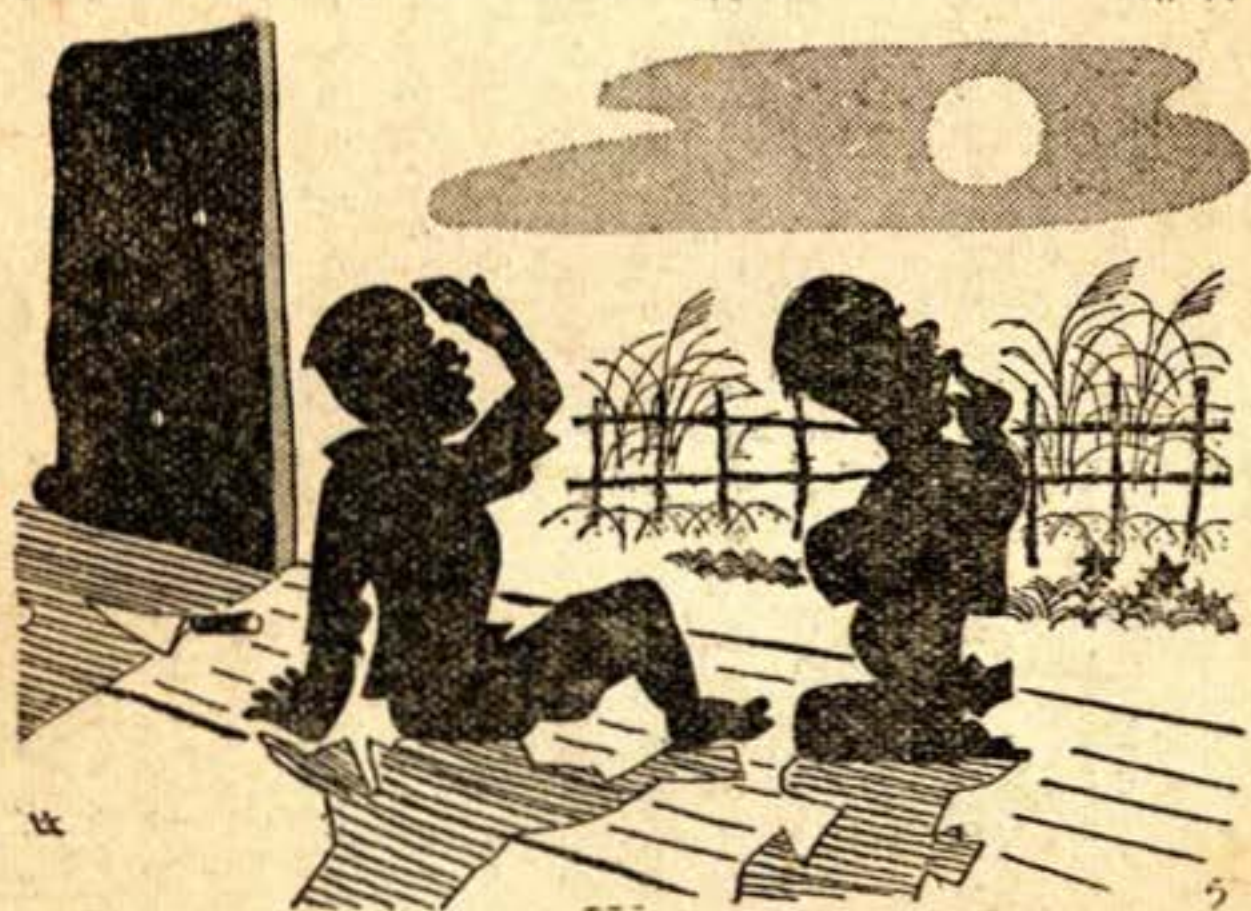
『いとし貴方の面影を……』

『やい、茶化さねえで、良く聞い
てる。この月を見て、戦地の兵隊
のことを思はねえやうな野郎は人
でなしだ。手前なんぞ、五體そろ
つた立派な身體を持つてゐながら

この御時世にぬすつとを働くこ
とは何ごとだッ。心を入れかへ
て、眞人間にかへれッー』

『へえ、何
んも申譯
が御座いま
せん。實は
私もさう
考へまし
たんで、仲
間の野郎に
もう盗人の
足を洗いて
えと申しま
した處が、
その野郎の
申しますに
は、そんな
意志薄弱な
ことでもど
うする。一
た

んこの道に足をふんごんだからは
石川五右衛門親分とか鼠小僧の



親分とか後世までも名を残すやう
な大人物、じやアねえ大泥棒にな
らなけりや生れた甲斐がねえ。ど
うか量見を入
れ代へて、
立派な泥棒
になつてく
れと……』

『やい、く
くだらねえ
こと云ふ
な、手前も
月を見て一
句ひねらう
と云ふ、い
くらか人
情もある
人間じゃね
えか。第一、泥棒が銃後の守りに
なるか。こゝで量見を改めて、
銃後の御奉公をしなくちやいけね

えぞ。』

『へえ、御意見すつかり身にしみ
ました。それではこの場で量見
改め——おッ、月がかくれた。
一寸この間に、』

『そんなら泥棒……』

『さらば——』
『變な野郎だな、芝居がゝりで行
つてしまやがつた。……あれ、ま
た引返して來て、井戸端で何かご
そくやつてゐるぞ。おい——そ
こは井戸だよ、そんなに處へ首をつ
ゝ込んでどうするつもりだ。身で
も投げる氣か、それとも水でも浴
びるつもりか。』
『いゝえ、足を洗つて參ります。』
燃ゆる火に灰うちまぜて念佛哉
鬼貫
散る花に南無阿彌陀佛と夕べかな
守武

信 仰 相 談

中村辨康師擔當……

(本欄への質問はハガキに住所氏名御明記の上信仰相談係宛のこと、誌上匿名は可)

無生忍と云ふこと

(問)

私は田舎者で識者の方などに御尋ねしても一向胸に落ちない事が色々あります。八月の浄土にも一寸出て居りましたが「無生忍」と云ふことは、一體何う云ふことなの

でせうか。平つたく御説明を願ひます。(長野下伊那・勝野生)

(答)

無生忍とは、一口に申しますと「永遠に生き

通しのものになつた、と云ふ自覺」に達したことです。「無生」とは「生き死の無い」と云ふこと、つまり生れ替り死替る、と云ふ轉廻が無くなつて、謂ゆる「生死解脱」したことです。また「忍」とは認めること、即ち

確信を得たことです。云ひ換へますと「生死」と云ふ相対的な

「生」が無くなつて「絶對的な生」を確かりと心に自得したことです。之では抽象的な説明

ですからよくお判りになりますまいが、具體的に申しますれば

「如來様」は「無量壽」でましますのですから、相対的な生で

はなく絶對的な生であります。即ち悠久なる「天地に満つる大

みのち」であります。此無量壽の如來様の中に、私達の身も

心も打ちまかせて歸命信願する時、私達の身體の生死はもう

如來様委せであつて、敢て私達自らの問題ではなくなつて居

ります。法然上人が「生けらば念佛の功を積み死なば浄土に参りなんとでもかくても此身には思ひ煩らふことぞなきと思ひぬれば生死共に煩ひなし」と云はれた其大安住の心境こそ此の無生忍です。

觀無量壽經の中にある「韋提希夫人」の證得した「無生忍」に就て「十信位の無生」か「初住無生」かと云ふやうな議論が、古來有つたさうですが、

私達に取つてそんな穿索はいらぬことで、昔は何でも事を重く見たがる癖があつたので、菩薩の五十二位の内の何處であらうかと推測した譯ですが、それは聖道自力の思想が抜け切れ

て居なかつたからではないかと思ひます。私達念佛の信仰に生きる者に取つては「すつかり如来様に委せ切れた心境に達したとき「無生忍」を得たのでりまあす。然し聖道門で云ふやうな「證悟」とは内容に於て多少相違して居りませうから、それで遠慮して「一分の無生忍」と云つてもよいだらうと思ひます。但し「一分」と云つても量の

の問題ではありません。かの「不斷煩惱得涅槃分」と云ふのと同じ意味です。理窟では色々小面倒なことがありませうけれども、理窟をこねると却て判らなくならませうから、極平つたく申上げた次第です。

宇宙には一貫せる眞理があつて、其活動は

永遠の生命と業の不滅

(問)

宇宙には一貫せる眞理があつて、其活動は

永遠の眞實である。そして人間は其眞實に熔け込み永遠の生命

信 仰 相 談

を把握する事に努めねばならぬと教へられますが、人間も宇宙自然界の一存在である以上、真理を辿つて行かねばならぬ事は無論ですけれども、一方に「肉體は亡びても業は永久不滅だ」と云ひ乍ら、一方では「永遠の生命を求めよ」と云ふが、よく判りません。永遠の生命とは一體何なのでせうか。永久に亡びざる業の外に求むべき永遠の生命と云ふものがあるのでせうか。

私は、現在事業界から身を引き生活を單純化しましたが、今日ではむしろ人生が退屈で淋しく、心の底には常に譯もなく悲哀が垂れ込んで、人生に少しも愉快さが感じられません。寧ろ生きて居る事が悲しみです。若し永遠の生命があるなれば、そしてそれが明朗な世界であるなれば、是非それを得たいと存

答

します。(京都上京・小林常人) 前の方の御説には多少異論がございますが、

それでは長くなりますので御尋ねの中心問題、即ち業の不滅と永遠生命のこと並に現に悩まされて居られることに就て少しばかり御参考に申し上げます。

業は絶對的には不滅ではないです。然し輪廻の世界に居る限り迷ひを離れて居ないから無論不滅です。不滅と云ふよりも益々擴大され、増大されて行くことと云ふ。少くともさう云ふ傾向にあるのが現在の私達の生活です。けれども其處には苦惱が随伴し、悲憂が同行して居ますから決して心安らかなる時はあり得ません。

隨て永遠ではあるけれども本當の理想的なものではなく、迷へる世界に於ての永遠生ではあつても、眞實な喜びに満つる

永遠の生命ではありません。だからこそ古來から多數の求道者が身命を惜しまず涅槃を求め菩提を求められたのです。涅槃は永遠の生命に於ての生活であり菩提はその心的状態です。つまり眞實な永遠の世界を身心の二面から觀察したものです。

佛教の實踐法としては之に對して色々な方法が説かれてあります。戒定慧の三學とか、六波羅密とか、四攝法とか、七覺支とか八聖道とか皆なそれです。然しそれは専門的な修道者にしても尙且つ及ばない事だつたのです。其處に他力救済門の信仰と云ふことが、必然的なものとなつて居る譯でもあります。

また御手紙に依りますと、人生に對する積極的なお氣持を失はれ唯だ憂愁を感じて居られるやうですが、それでは折角人生に生を受けた甲斐がありません。

せんでせう。「よくぞ人間に生れ來し」と云ふ生甲斐を感じなければ、折角の五十年を棒にふる云ふものです。一日も早く信仰にお入りになれるやうお祈りします。

信仰に入り段々精神界のことが明るくなりますれば、必ず永遠の生命に就てハッキリした認識も出來、また淨土的「無生忍」即ち無量壽の中への歸一が確信されて參ります。さうなれば無論、愉快な長閑な人生を味ふことも出來ます。何うぞ一心に念佛して如來様への信仰を深めて下さい。そして天地の悠久なるに比して、誠に短い、そして短いだけそれだけ貴い人生を朗らかに生き抜いて下さい。決して「生きて居る事がむしろ悲しい」などと云ふやうな勿體ないことを、お考へならぬやうになつて下さい。

金銀運動ニユース

今後の時局に應じて

本會の發展を策す

—本部會を開催す—

本會も既に第四年を迎へ、愈々充實して來たが、時局に對應して「淨土」の使命の益々重大なるものあるに鑑み、一段の飛躍と充實を期して、去る九月五日午後一時より本部に於て幹部會を開いた。中村、江藤、里見の各理事、佐藤主事、金氏等參集、種々具體策を討究した。先づ本會の財政を研究し、時變以來紙を始め總べての物價騰貴せるにも拘らず、あく迄十錢を嚴守し多大の犠牲を拂つてゐるが、會費の拂込は案外悪く、二年三年と會費不拂の人もあり、之等の整理を斷行する事を申合せたが、全國の會員諸氏も本部の犠牲的出版の實狀を斟

酌してどしどし會費を拂込まれん事を願つておく。更に編輯の刷新、事務の敏速等をはかる爲に、中村、江藤氏が出来るだけ東京に在住して、本部員を鞭撻する事も決定。今後の活躍に資する事になった。



「慰問淨土」で法縁を結ぶ

白衣の勇士に法味を捧げよと宗教所が提唱してゐる「淨土」の軍病院寄贈の運動に和して、毎月七日奈良軍病院に「淨土」五十部と慰問品を添へて見舞つてゐる淨土宗奈良教區報國團では、今度から愈々法縁が結ばれて軍病院の講話を擔當することになり。來る九月七日第一回の講話を開くことになったが、當日は慰問演藝會を開催白衣の勇士を慰める筈。

貞恭婦人會例会

九月十一日午後三時より明照會館にて佐藤賢順氏を講師を講師として例会を開催したが、聖典講義を聴講する豫定を急に變更して、當編輯部員を加へて時局座談會を行つた。談論風發、紙上に發表全部出来ない程活潑な談話も應酬して、頗る活氣に溢れた會であつた。詳細は別記の速記録を参照のこと。

戰場に菩提を弔ふ

三浦・筑紫兩君

身は僧籍にありながら、大君に召されて敢然と銃をとつて聖戰に活躍してゐる人々は頗る多い。之等の一人は戦へば勇猛果敢、しかも一度は戦終れば戦友の回向に心からなる讀

經を捧げてゐる。こゝに掲げたのは淨土宗出身の三浦筑紫兩君が原地に於て敬虔な回向をしてゐる寫眞である佛教徒の眞面目さにありだ。兩君の健在を切に祈る。

慰問「浄土」 寄贈者芳名 (第六回)

貳圓也	南海教區愛媛組	本	善	寺	五拾錢也	朝鮮慶南居昌郡	張	鳳	成
貳圓五拾錢也	伊勢教區西組	光	照	寺	八圓五拾錢也	山口教區布教委員會青年聯盟			
拾圓也	京都府久世郡小倉村地蔵院内	小倉村尼講中			參圓也	山口教區西組	周	慶	寺
拾圓也	愛知縣中島郡大和村安賀	今	枝	俊	壹圓也	山口教區西組	謹	法	青年會
壹圓也	岩手教區盛岡組	安	養	寺	壹圓也	山口教區西組	普	門	寺
參圓也	滿洲國安東市山手町	安	東	寺	壹圓也	山口教區西組	津	西	寺
貳圓也	兵庫縣武庫郡神道村	池田吉兵衛			拾圓也	愛知縣幡豆郡寺津町	宮地	理	成
壹圓也	山口教區西組	蓮	間	眞	貳圓也	山口教區長東組	常	念	寺
貳圓也	岐阜教區大垣組	林	香	寺	壹圓也	東京市下谷區金杉上町萬徳寺	高	井	英
參圓也	秋田縣北秋田郡	正覺寺合衆會			金一圓	下關市安岡本町	尾	寺	宏
貳圓也	滋賀縣東淺井郡大郷村	吉村辨中			金一圓	大阪府高槻町法藤寺	長	寺	宏
五圓也	大坂市天王寺區生玉前町	本	誓	寺	金拾圓	兵庫教區但馬組	組	長	坂
拾圓也	三河教區	豐川組寺院一同			金三圓	天津日本租界福島七五	古	川	福
參拾圓也	大坂市東區上方町念佛寺青年會	中	易	善	金一圓	埼玉縣松山町城崎寺	町	野	重
壹圓也	山口縣古賀郡井嶋村阿知須	田	中	茂	金一圓	相	川	大	眞
壹圓也	千葉縣富浦町	和	田	正	金五圓	京都京極組	矢	櫛	親
壹圓也	八	安	富	勝	金五圓	竹林院	賀	幡	定
貳拾圓也	山口教區長西組	綿	谷	智	金五圓	同	袋	牛	庵
拾參圓也	山口縣王寺	天	然	寺	金五圓	京都大宮組地蔵堂	寺	田	辨
參圓也	甲縣市泉町	田	村	芳	金二圓	同	西	岸	寺
參圓也	千葉縣船形町	金	二	圓	同	同	井	上	惠

八月分

金七圓	同	洛南組	法	泉	寺	振
金一圓	同	池田しよ、松浪すが、奥村すな、齋藤もと、齋藤たつ、三浦じゆう、土國いと、				
金四圓八十五錢	同	堀河泉河南組	秋	玄	寺	
金二圓	同	同	正	圓	寺	
金五圓	同	同	大	正	寺	
金三圓九十錢	同	同	稱	迎	寺	
金二圓二十錢	同	同	大	恩	寺	
金五圓〇五錢	同	同	明	光	寺	
金三圓二十錢	同	同	正	緣	寺	
金二圓二十五錢	同	同	西	蓮	寺	
金一圓	同	山口長東組春陽院	鳥	井	仁	寺
金一圓	同	同	西	光	寺	
金一圓	同	同	某	北	組	寺
金五圓	同	三河教區	吉	川	宏	寺
金三圓	同	大坂市西城區出町本町	尾	張	葉	寺
金一圓	同	尾張葉栗郡淺井町	三	木	榮	寺
金一圓	同	名古屋市中區千早町	早	町	某	寺
金一圓	同	小樽市都通	平	井	某	寺
金一圓	同	東京大森田園園布	石	川	道	寺
金五圓	同	鳥取教區寺土宗	池	田	ふ	寺
金二圓	同	大阪府泉南郡尾崎村	同			

— 以上九月十日迄 —

慰問「浄土」の御寄附は表紙の
廣告御参照の上奮って御後援
の程御願申します。— 浄土宗

★讀者だより★

戦地より

川村信次郎

貴會より御清勝の段大慶至函に存じます。不肖私に貴會とは始めてですが、五月下旬突然動員下令、目下〇〇にて陣中勤務に精勵致してゐます。小生宅は祖先傳來の農業を営み居り、小生も長男にて父母とともに今まで農業に従事してゐましたが、至極順調に人生をわたりこれと云ふ苦勞も経験いたしません。しかし何の因縁か佛教の書物が大好きで、家に居る頃より暇ある毎に拜見してゐました。しかるに此度戦地に臨み明日の命の割り知れない時、一入佛教の書物を懇しく思つてゐました。品の中にもなく弱つてゐました。戦友の一人が故郷の佛教聯合會から慰問の爲に貴會發行の「浄土」を贈られ、小生は直ち拜借して拜讀致しました。久しく佛教書に遠ざかり、しかも戦地での拜讀でしたから讀後和やかな氣持になりました。誠に佛教のむづかしい教理をやさしく解説されてゐて大變啓蒙され生れました。目下戦地に臨み、敵兵とにらみ合つてゐますが、銃剣を擬し亂射亂撃中でも念佛を唱へて敵味方の區別なく阿彌陀佛の護念を念じてゐます。當地に來たり始めて大乗佛教相應の日本國に生を受けし幸を一入有難く感じました。戦地で始めて拜見した「浄土」も何かの因縁と存じ、拜讀の餘悦のまゝ、書きまし。た。銃後教區指導の爲に愈々御寄附あらん事を祈ります。不肖私に君國の爲に奮闘の利剣を揮ひ、皆様の御期待にそむたく思つてゐます。

編輯部へ 京都・永田七郎

殘雪の折柄皆々御多謝し奉ります。就ては早速編輯部へお願ひ申上げますが、讀物のうち、歌と俳句の撰者先生の御心遣と御撰の書きの程を願ひたく存じます。我々初心者の参考となること充分と存じ、簡単ながらお願ひ申上げます。



水禍の中から

(神戸) 圓山輝二

七月五日、阪神間交通機關杜絶の報を耳にして正午過ぎに會社に出たものゝ、西ノ宮以西は線路傳ひに歩く外なくそれさへ危険とあつて國道を、服や靴を小脇に抱へて奔流をざぶく横切りながら遮二無二歸途を急いだ私は、芦屋川や住吉川邊の氣の毒な家を目の邊り見るにつけ、自分の家も其時既に同様な運命に陥て居るとは夢想だにもしなかつたので同情で胸の詰る思がしたことであつた。

徳井から山手へ省線を横斷した頃から兩側

の家の只ならぬ様子に感付き始めたが、多分下水が雨で溢れたのだらう位に思つて、未だ其時迄は、歸宅したら泥に汚れた手足を、風呂場で洗へる位の、今から思へば呑氣な氣持で居た。而して愈々阪急線のガードに差しかけた際、目前の異常な光景に、はつとして唇が痙攣した、一抱以上もある松の木が幾本も根こそぎ横倒しになつて、ガードを塞いで居り、埋高く盛り上つた土砂の中に、岩石は累々と重り合つて見るも凄惨な有様に「ヤ

ラレター」と直感した私は無我夢中に、常よりも一丈以上も高くなつた道を息もつかずに駆け上つた。其の私の目の前に展開されたものは一面の河原と化した住宅街に、大屋根だけが點々と浮島の様に土砂の間から見えて居る、通り魔の様に過ぎた山津浪の跳梁の跡であつた。

吾が家とは見れば角ど家であつた爲、道からと北からと兩方から雪崩込んだ土砂の爲、二階迄埋れて裏から表へ座敷の中を突き抜けた奔流の故か、二階の南の硝子戸は無慘にも粉碎されて居るのが目に入つた、瞬間、何とも云へぬ惡寒が、さつと身内を襲つた、何れも七十歳以上になる足の不自由な父と、高血壓で床に就て居た母の安否が氣遣はれて、あの災厄では逃げられたかしらんと思ふと何となしに胸騒ぎがして思はず念佛を續けながら石と木の間を轉ぶ様にして駆け上つた。

此の時二軒隣の二階から飛び出して來た妻から、父母は近所の寺へ無事に避難して貰つたと聞かされた時「まゝ良かった」と思ふと

目がしらが熱くなるのを覺えた。

それから土砂の上を越えて吾家の裏二階を

覗いて見た、二階の床の上、二尺位迄土砂に

埋れて、石屋川の決潰ヶ所から押し流して來

た松の木や建物の端片が雨戸と硝子障子を突

き破つて矢模の様に突き刺さつて居り、三抱

以上もある岩石がごろ／＼座敷の中に土砂と

共に雪崩れ込んで梁をへし折り床板を打ち抜

き、疊は落ち、机は階下へ転落し、屏風は倒

れて半ば埋れ鏡臺は毀れ、簞笥や或は戸を開

いた儘、中味を泥水に洗はれ、或は何かにあ

たつて微熱になつて流出したものか、僅に抽

斗の一部が抜けて泥の中に引手の端片を残す

等、實に慘禍を極め、座敷の中は勿論、柵や

簞笥の上に置いてあつた小物は全部水と共に

流出又は埋没したものか影も形も無く文字通

り泥澤の廢墟と化した家の中を見て、之れが

其の朝廷自分達の起居して居た居間かと思ふ

と餘りに變り果てた其の慘狀に只呆然として

涙さえ出ず失神した様にうつろな眼で、ばら／＼の残骸を見守るのみで何からどう手をつ

けて良いのか頭がしびれて判斷する力も急に
出て來なかつた。

然し其の時驟然として私は悟つた。二十年

の勞苦を一時で空にした事に自分としては

諦め切れぬ思出は残るが、家族が皆助かつた

のである、之れこそ何物にも代へ難い事では

ないか、假令衣類や家財道具の全部が無事で

あつても家族の一人でも失つて居たとしたら

遺憾は永久に盡きないであろう、眞に不幸中

の幸であつた、さう思へば感謝すべき事は

多い。中にも、あの際、豫ての念佛の功力に

依り一切の物慾を捨てたればこそ老人共を助

け得た妻の處置を憂めてやらねばならぬと思

つた。

やがて壊われた家と残つた家財を見捨てて

其の足で父母を避難所の寺に訪ねた。

寺には罹災者が本堂から玄關迄ぎつしり詰

て居て何れも恐怖と落膽に顔色も蒼ざめ此の

先奴何してよいかに困惑して、おろおろして

居る氣の毒な人達ばかりであつた。
父は玄關側に借り着の、レインコートに包

まつて目をしばたいたいて居り、母は私の顔を
見るなり「えらい事になつたなあ」と云つて
袖口を目にあてゝ泣いた、自身が裸になつた
事よりも永年かつて蒐めた多くの物を一瞬
で失くした悴を不覺に思ふ親心で涙を押へる
ことが出來なかつたのだらうと思ふ。私は何
か云はうとしたが口がこわばつて何も云へな
かつた。

然しもう其時の私は過去をして過去を窺ら

しめよと觀念して居たので頭の中は明日の事

で一杯だつた。此處へ來る途中も妻から、應

々二階の天井迄水嵩が増して來たら老人達は

到底大屋根へ上れる見込は無いので三人一所

に死にませうと云ひ合つたと聞かされた時、

私は斯うして無事な家族を見る事の出來た感

謝にじつとして居られない氣持にかられ、取

り敢へず大阪の會社と、神戸の親戚へ電話を

しやうと公衆電話へ駆け付けたが、もう其の

時電燈も電話も全部駄目だつた。それから大

石川の親戚の事が氣になるので小雨の中を省
線傳ひに歩いて行つた、途中闇の中を避難す

猛火の中に如來とともに

富山、永見町大火の實話

長谷川良弘

信

仰

實

話

颯風の猛威にあふられて、煙草の火から一千五百戸を全焼して、哀れな業火の熾となつた私の郷里富山縣氷見町の大火災に早速にかけつけ、師籍の無残な姿の前に茫然自失、暫しして自分の幼時より吾が子の様に育てゝくれた類焼の檀徒を涙ながらに見舞つてゐる中に、私は自分の眠れる心に聞き難い生命の聲を聞いたのであつた。

今日、佛教は生命を失ひ、その指導性を失つたと言はれるが佛教王國の北陸に立ちあがるけだかくも尊い彌陀信仰の發現を見て、天の下し給へる可憐なきこの鐵槌の前に雄々しくも立ち上がる信仰の力の偉大さをしみじみと感じて、信仰なくしては何事もなし得ない

尊い導きを報告したいと思つた。

九月六日の正午のラヂオニュースは富山縣氷見町の大火災を報導した。故郷への思慕、師籍の安否に戦きながらもニュースに聞き入る。ニュースは公共の建築物は凡て類焼した旨を報導した。所詮助かる見込はないと斷念しつゝ、直ちにその夜上野驛をたつたが、類焼した小學校と警察署の間にある師籍の見るも無残な堂宇の前に立つては慟哭の涙にくれたのだつた。幼少の頃から明幕給仕申し上げた阿彌陀如來も今はあまらず、一望燒野原の變り果てた世界となつてゐるではないか。

なつかしい檀徒の人々にせめてなぐさめの言葉なりとて、こみ上げる涙をおさへつ

つ燒野原を一巡したが、褌一枚の着のみ着のままの無一物の人々と言葉をかはす心の中は、たゞ張裂けんばかりであつた。瓦と土と黒焦の金具の他はことごとく燒き盡した燒跡に立つ類焼の人々の面持、悄然として爲すすべを知らぬ憂愁の顔。

涙と共に見舞ひしながら、私はこれら憂愁の人々の内心に生ける生命の躍動、佛教によつて養はれ來つた尊き精神を聞き取つたのである。たゞずむ人々の語り草を、道歩くこの自分の耳に、胸に。

風速十五米、六日午前零時頃から驛附近に火元を出した町の人々は火元の親類知己の安否をきづかひ、隣人愛の聖行に走り續けてゐた。あんな大火にならうとはまだ思ひもかけなかつたのであらう。然し火焰は颯風のために處きらはず四方八方に飛び、火の手は他家の安否に馳せつけた各人の家に移つてゐたのであつた。

六七時間の中に一千五百戸を燒き盡したこの猛火のために、引き返すまもなく既に吾が家

は燃え盡されつゝあつた。前も火、後も火と山と海とに夾まれた細長い一里餘の氷見町はかくして燃え續け、自然の命令のまゝに全焼して行つたのであつた。

海にとび込む者、川にとび込む者、山に逃げる者、そうして親は子を、夫は妻を、老ひは若きを見失ひつゝ、裸一貫、唯からうじて逃げまどふことのみがその時なすべき凡てであつたと言ふ。

仰 執着、それは限りなき思慕でもあるが、吾が家に對する執着、金に對する執着、家財道具に對する執着、それは實にかゝる不慮の場合に於て、より狂暴的に現はれてくるものだ。金と思つたものが石であつたり紙であつたり、高價な着物と思つた物がぼろ着であつたり、凡て價値なきものが價値あるべきものに置き換へられて、その周章狼狽の如實相が遺憾なく發揮せしめられる。人間の弱點は外界のみだれと共にあらはに姿を出してくるものである。

自分が今こゝに書くこの話は、實にこの人

間の弱點の中にあつて、よくその斷ち難い執着を捨て、聖なる信仰の實踐行をなし得た一老婆の尊いエピソードである。

それは師籍の檀徒で八平の婆さんと呼ばれ、小僧の時分から今まで人一倍なつかしみを以て迎へてくれるお婆さんである。確か六十四五歳であらう。家を焼き家財道具の凡てを焼き、今はその焼跡に立つてつきぬなごりの中に、私に語つた言葉、これあるかなと吾が胸を打つた新建設への生きたる尊い言葉だつた。

八平の婆さんの家は私の師籍から一町ばかり離れた海岸の近くにあつた。火の手はあちこちにあがり、火元附近にかけつけた後の空家は既に火が燃移つてゐた。はせ歸つた時分には老いたる婆さんには如何ともすることの出来ない程であつた。この火焰の中にかけてた田舎の縁者に、阿彌陀様を！ 如來様を！ と聲を限りに頼むその聲に、縁者は身命を捨て、大火焔の中に躍り込んだ。家の周圍をまわ火焔の中で唯々合掌稱名をして如來

様と縁者の安全を一向に祈願してゐたが、その念力によつてか救ひ出された本尊阿彌陀如來の像を、この老婆は胸にいだいて、前に後に狂ひたける火焔の中を避難したのであつた。

『全く如來様の御救ひか、不思議と自分の行く先きは火焔の道を開けて下さるやうに、自ら道が開けて來まして、命拾ひをさせていたゞきました』

と涙ながらにこの救ひに對する有難さに感謝するのであつた。

『この通り今着てゐる寢巻き一枚だけで、何物も出すことが出來ませんでした。唯如來様だけはどうしても御救ひ申し上げなくてはと一心でした。いや如來様に依つて危きこの命を救はさせて戴きました。如來様を御出し申して心残りはありません。御先祖様から傳はつたこの如來様の加護により子供や孫を勵まし、御先祖様と共にこの思慕の地を立派に復興して行きます』如來に抱かれてつゝ、まじやかに語る老婆の姿は昨夜の戦慄を忘れた

かのやうであつた。如來に身をまかせきつた安樂の法悦境にひたつてゐた。

今度の大火災に於て五六人の人が死んでゐると聞かされた。それらの人々はほとんど逃げられないことはないのに、凡夫迷情の執着に堅縛せられて、たゞ金や大切なるものを少しでもと、火煙中にとび込み、終に逃げ場を失つてあはれ火煙にまかれてしまつたのであつた。これらの人々のあはれな死を見て、あの老婆の生けるこの言葉に現はれた輝かしい信仰的實踐躬行はます／＼私の胸をうつつた。これこそ如來と共に歩む尊き信仰生活の現實的な救ひである。

「神符と佛様だけは取りあへず出しましたのですが」

と私は人々の語り草を道行く中に聞いては、なほ人々の中に生きてゐる如來への信仰の生きた相を見出して喜んだのであつた。力強き信仰の歩み、この老婆によつてなされた尊い救ひこそ、私は靜かに今日の日本全國の人々に深き反省の糧を與へてくれるものと思つ

た。行動の重ぜられる今日、その行動に對する精神力の範をこの老婆の心の中に見出して

戴きたいと思つた。天地の災害は唯この尊い天の下し給へる命令であると確信し服従するの時、始めて光り輝く如來の光りをあをぐのである。火煙の中に執着緊縛に自らがしばられる時、自らその生を斷つ愚をなさざるを得ないのである。吾人はすべての執着を斷ち、空に徹する佛教の教に隨順すべきである。如來と共に生くる人々にこそ眞に生くる救ひの御手がさしのばされるのである。國民精神總動員による國難打開は一にこの無一物の境地からする理想實現への願望に基づく信仰的生活の實踐に依つて始めて可能である。

私達佛教徒は全國民より一步先にいで、先づこの老婆の所行を、己の所行となしたいものである。この信仰に基づく行動こそ眞に彼岸に到達する大道であることを體驗し、燃野原の故郷に立つて、自分の眠れる心を鞭打つたのであつた。(二三・九・十四)

(××頁より) 行く様な形身をして罹災地の彼所此所を見物に来る、モダンボーイやガールを見ると炎天下に喘ぎながら勤務に奉仕して居る人々たらずとも腹が立つてスコップの泥でもかけてやり度い氣持になる事もあつた。

昨今漸く復興の途上に有る罹災地に又しても小雨が降り續き人々の顔は憂鬱に閉されて居る。雨の晴れ間、濡れた緑の六甲に、しげしげと見とれて居る私は暴威を逞しうした山ながら此の六甲が何としても憎めず、やはり此の山に心引かれて、他へ居を移す氣持に成り切れずに居る。而して今も尚、朝夕憧憧の山麓に在る私の心境は、座敷に掛けてある額額の「心澄氣清」そのまゝで、何等心に懸る雲もないが、唯一つ知己友人から寄せられた好情に報ひ得る日の一日も早く到來せむことを念願するのみである。

回顧すれば災害の日から丁度一ヶ月、今日も亦感謝に明け感謝に暮れつゝ心靜かに思ひ出の筆を擱く。

編輯後記

◇秋深き隣は何をする人ぞ

思索の秋、反省の秋、精進の秋です。そして信仰の秋でなければなりません。

◇漢口陥落も目眩に迫つて、長期戦の體制はいよいよ本腰を入

てかゝらねばならなくなつて來ました。この秋にこそ公私生活の上に確固たる轉換を計らなければなりません。それは私生活と社會生活との間の矛盾を反省し克服し、確固不拔の信念を以つてそれを實現することです。搖ぎなき信仰のみが最もそれをよく爲し得ると信じます。

◇九月一日、震災の思出も深い日に關東地方を襲つた颱風、續いて四國、近畿地方を襲つた風害等愛讀者各位の中にも被害を被られた方々が多々あると存じます。

謹んで誌上より御見舞申上げ、復興の一日も早からんことを祈つて止みません。お蔭を以つて、本社にはさしたる被害も御座いませんでした故御安心下さるやう。

◇この風水害の中から、信仰を以つて雄々しく復興に立上る人々の姿を、特に信仰實話の中に掲げました。

◇今月號に掲載する管でありました「法然上人をめぐる人々」は執筆中村康隆氏の都合により來月に廻しました。資料を充分に検討して力作を發表する筈です。

◇本會の創立以來寧日なく盡力せられた辻重光少尉も過日は颯爽として出征しました。

◇また久しく本誌のために美しい挿繪を書いて下さつた青柳喜兵衛氏は八月三十日その先途を惜まれつゝ逝去された。謹んで弔意を表す。

◇本會出版物の御注文は振替郵便が御便利です。振替口座番號は東京八二一八七番

◇御注文の場合は種類、部數、代價を楷書で明瞭に御書き下さいますやう。尚送料をお忘れなき様願ひします。

◇勝手乍ら代金引換は一切お断り申上ります。

◇その他お問合せは往復はがきかまたは返信料同封で御願ひします。

◇本誌掲載の廣告は一切左の店で取扱つてをりますから、廣告掲載御希望の向は直接その方へ御問合せ願ひします。

本誌廣告一手取扱

株式 正路喜社
會社

東京市京橋區銀座西七丁目
電話銀座代表 五七六六

淨土 十月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和三年九月三日印刷納本
昭和三年十月一日發行

(定價十錢)

編輯兼 眞野 正順
發行人

印刷人 赤尾 光雄

東京市牛込區市谷加賀町一ノ二
印刷所 大日本印刷株式會社

發行所 法然上人續仰會

東京市芝區芝公園明照會館内
振替東京八二一八七番

「淨土」購讀規定

一部 定價 金十錢
(送料五厘)

一ヶ年 金一圓
(送料不要)

法然上人傳

中里介山著

文豪の手で再生された「勅修御傳」、これで
原典の精神に誰れでもが親しめる！

著者の言葉から……法然上人傳の權威は何んと云つても「勅修御傳」である。

「勅修御傳」即ち「法然上人行狀繪圖」は伏見天皇、後伏見天皇、後二條天皇の三帝が
法然の遺徳を深く敬信なされてゐたが、その時分は異教の手あひが争ひ起つて妄りに
法然の傳記を作るに至つたので、正統の深くこれを憂ひ、天子にも御心を惱ませられ
た結果、後伏見上皇の勅により叡山功德院の舜昌法印が近代杜撰の著作を捨て、信用
すべき實録をとつて收め、(中略)十四年を経てこの行を了へたものである。(中略)そ
れ等を要譯してこの雅文の典籍を比較的安易に讀ましむることは現代人に對する一つ
の親切であると信じて、敢てこれを爲して本書を作つた僭越の罪を許されたい。

三六版二五〇頁

美麗クロース装

定價 六十錢

(送料六錢)

發行所

隣人の友社

發賣所

法然上人鑽仰會

芝區芝公園明照會館
振替東京八二一八七

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可 (毎月一回一日發行)
昭和十三年九月廿日印刷納本 昭和十三年十月一日發行

淨土第四卷 第十號

定價 金十錢 (送料五厘)
滿鮮臺灣等 金十一錢
外地定價